洩すことが無かつたであらうか、しかし返す返す秘密を胸に閉ぢて來たと云ふのであるから、さうでもないかなどと、薫の君はさまざまに思つた。粥などが出された。　昨日は休んでも好い日であつたが、今日は宮中の御用もあり、冷泉院の女一の宮の御病氣のお見舞にも必ず今日行かねばならぬことを云つて薫の君は宇治の宮から歸つた。　薫の君は家で辨の渡した袋を出して見た。　支那の浮織綾で作られたもので、上と云ふ字が書かれてゐる。　口を括つた細い紐の結目に貼つた紙に柏木の君の名が書かれてゐる。　開けるのも恐しい氣がする。　手紙はいろいろの紙に書いてあつた。　柏木の君の手で、

病は重く、生命のはて近き今日となりて、逢ひまつること難し。　見ま欲しく思ふもの、猶君の外に添ひたるも苦し。　君は御姿變へ終りて居給ふか。

などと、さまざま悲しいことを五六枚の紙に、重い病苦の中で書いたら

しい字のもある。

子を前にして世捨人となり給ひし君の悲しみよりも、一目だに見ずて生命終へむとする親の心を哀れと思ひ給へ。

こんなこともその中に書かれて居た。

生命あらば他所ながらも見らるべきに、我子を戀しき君に生れたる人を。

終りは書きさしたままのやうである。　上には、侍従の君にと書いてあつた。　衣蟲の住家になつた黴臭い紙に書かれてありながらも、一言一句に血が流れて居るやうな生生しい苦悶が浮いて見えるのであつた。これが若し人目に觸れたならと、薫の君は思はず戰慄したのであつた。こんなことがまたと世界にあらうかと思ふと、心が暗くなつて、宮中へ直ぐ出ようと思つたことも止めてしまつた。　尼宮のお居間へ行くと、無心な若若しい顏をして經を讀んでおいでになつた宮は、恥しさうに

経巻を隠しておしまひになつた。自分はこの思ひを永久に母に隠しておかねばならないと薫の君は思つた。

椎本

二月の二十日過ぎに兵部卿の宮が大和の長谷寺へお詣りになつた。ずつと以前から行きたいと思つておいでになつたことに違ひないが、今度のお目的は其處よりはお通り路の宇治にあつたらしい。高官達が幾人もお供に行つた　それ以下の役人のお隨きして行つたのは數も分らぬ程である。六條院の傳領で、夕霧の君の所有になつて居る家が宇治川の向岸にあつた。廣い立派な別莊である。其處で御歸途の休息がある筈で用意がされてあつた。宮がお著きになつた時、夕霧の君は此處迄お迎へに出る筈であるが、差支へが出來て來られないと云

ふことを申し上げる使が寄越してあつた。宮は伯父の大臣と一緒になることを迷惑に思つてお出でになつたので、それがお嬉しかつた。出迎ひに來た人の中には薫の君も居るので、川向ひの山荘住居の人達に近附く機會も樂に出來ることであると樂しみにお思ひになつた。夕霧の君の息子は五六人お供して居た。陛下も中宮も勝れてお愛しになる宮のことであるから、御威勢の高いことは云ふ迄もなく、六條院の一族の人達は殊にこの宮をお大切にして居た。行屆いた設備の出來てある長閑な場所で、一行も迎への人達も伸伸と心をさせて遊んで居た。宮はお馴れにならない旅の疲れをお覺えになる上に、懷しい宇治で一夜を明したいお望みもあつて、其日のうちに京へ入らうとはされない。夕方に琴などを出させてお遊びになつた。かう云ふ所であるから澄んだ音が立つ。八の宮の山荘へはどの樂聲も手に取るやうに聞えて來た。

『上手な笛だ、誰だらう。昔聞いた六條院のお笛は花やかな氣分のものだつたが、この笛には莊重な所があるから、前前の太政大臣の方の人の吹くのに似たやうに思はれる。』

八の宮はこんなことを云つておいでになつた。

『管絃の遊びなどをしなくなつてから私はもう何年になるだらう。哀れなものだ。』

ともお獨言をお云ひになつた。美くしい姫樣達を自分と同じやうな埋木で果てさせたくない、さうでなくするにはどうすれば好いかなどと憂慮をしておいでになつた。源中將を婿にして見たいとは思ふが、その人がさうした心になつてくれるかは覺束ない。また多くある浮ついた若い人達と結婚させる氣には固よりなれない。こんなことを夜通し思つておいでになつた。旅の人達は面白い際の裡にもう夜が明けてしまつた氣がして、宮は今日お歸りになることを頻りに辛くお

感じになるのであつた。遠く廣々と霞んだ空の下に散る櫻や、漸く盛りにならうとする櫻などが種々と見えて、河添柳が微風に靡いて居る水の影などの趣の深いのに、宮は恍惚とした氣分になつておいでになつた。薫の君は好い折であるから、八の宮をお訪ねしたいと思ふのであるが、大勢の居る前で一人だけ船で向うへ渡るのも目立つことであらうからと躊躇して居た。其處へ八の宮の方からお使が來た、

山風に霞吹き解く聲はあれどへだてて見ゆる遠のしら波

美くしい字で宮がお書きになつたこの歌を持つて來たのである。

『私から返事を上げよう。』

かう匂の宮はお云ひになつて、心をときめかせながら返歌を書いておいでになつた。薫の君は向ひの山莊へ渡つて行くことにした。音樂好の若い人達を誘つて船で酣醉樂を奏しながら行つた。川際の細座敷から船の乘降にする橋が水面へ斜めに出されてある構造などの極

めて品の好い山莊である。初めて來た人達などは我が威儀が崩れはしないかと顧みながら船から上つた。お座敷の方は淋しい趣を見せた網代屏風などが立てられて殊更質素なしつらひがしてあつた。そして何處迄も綺麗に掃除が行届いて居た。昔からの名高い樂器などを一度に態とらしくお出しにはならずに、一つづつ見計つて客の前へお運ばせになつた。櫻人の曲が合奏されたのである。宮の一絃琴を此機會に聞きたいと皆の人は思つたが、宮はほんの附合ひのやうに時時十三絃をお掻き鳴しになる丈であつた。これもお聞きしたことのない人達ばかりであるから限りなく面白く思はれた。主人側には王氏の若い公達などが幾人も來て居た。四位ぐらゐの老いた官吏なども多く見えた。客は皆意外に思つて居た。兼々この宮に同情を持つて居て、若し匂の宮の宇治泊りに客などをおしになることがあつた時、不都合をお感じになるであらうと思つた人達が、云ひ合せたやうに集

つたのであるらしい。饗應の席をとりもつ人なども皆綺麗な姿をして居た。客の中には山莊の女王達に今初めて戀を運ぶ者もあつたであらう。匂の宮は川を渡つて行つた若い人達を羨しくお思ひになつて、戀のためにはその人等と身を變へたいお心をも起しておいでになつた。それで手紙を女王にお送りになることには手蔓も何もお構ひになることが出來ずに、綺麗に咲いた櫻の枝を折らせて、それに結び附けて美くしい童侍に持たせてお遣りになるのであつた。姫樣がどうすれば好いかと當惑して居るのを見て、

『かう云ふ時のことは唯の風流事なので御座いますから、重くおとり遊ばして返事をお上げにならずに置くと云ふやうなことは却ていけないかと存じます。』

古い女達はかう云つた。姫樣は小姫樣に返事を書かせた。

かすかすの山の花折るかへり路にわが里過ぐる春の旅人

美くしい品の好い字でこんな歌も書かれてあつた。藤大納言が公式の使になつて迎ひに來た。大勢に守られてお歸りになる宮は、また何か別な機會を作つて宇治へ來て見ようと心を決めておいでになつた。其折にもう一度思ふことを云つて遣りたいと思ひながら、人を憚つてお止めになつた宮の遺憾は限りなかつた。それから後にまた京から度度手紙を送つておいでになつた、

『三の宮さんは風流男で居られるのだから、唯若い女との交渉が面白くてさう云ふこともされるのだ。深い意味にとることもいらないのだから、返事をお上げなさい。さう云ふ友人が一人あると思ふと刺激になつていい。』

かう云つて父宮がお勸めになる時、返事の書役にされるのが小姫樣であつた。大姫樣は噓にも戀と云ふやうなことに興味を持つことが出來なかつた。美くしい二人の女王をお見になる度に、かうでもなかつ

たなら、淋しい運を荷はして置いても親心は却て安いことであらうとも宮は思つて歎いておいでになつた。大姫様は二十五、小姫様は二十二になつておいでになる。宮は今年が凶い年にお當りになると云ふので、心細くお思ひになつて、佛勤めを是迄にもまして弛まず行つておいでになつた。現世の執著などは勿論少しもおありになるのでないから、清い往生の日ばかりを望んでおいでになつて、そのために一日でも自身を出家の人としてありたくお思ひになるやうであるが、いよいよ其時となつたら、やはり女王方のことでお心が亂れるのであらうと女達などは云つて居た。宮は相當な身分の、誠意のある男で、女王との結婚を望む者があつたなら、自分は知らず顔で許しても好い、一人だけでもさう身が決つたなら、殘つた一人も氣安く居られるであらうとお思ひになるのであるが、そんな眞面目な戀をしようとする人もない。稀には一寸した手蔓から世に有りがちな浮ついた戀の形式で手紙を

送つて來たり、初瀬や奈良へ行く短い旅の中宿をこの邊に取つたものが挑むやうなことを云つて通つたりしないではないが、侮蔑してでなければ出來ぬやうなそんなことをする人達には假初の返事もお遣らせにならなかつた。匂の宮はどうしても得ないでは置かないと云ふ熱情を持つて戀をしておいでになつた。薫の君は中納言になつた。ますます威望が加つて見えた。その人はこんな日に逢ふにつけていよいよ物思ひが深くなつて行くばかりであつた。何事を知る絲口も持たなかつた昔よりも、肉身の故人の死に至る迄の悲しい苦悶の狀態をくはしく聞いた今は、その靈の贖罪のために佛勤めに精力を注がなければならないと云ふことが痛切に感ぜられるのであつた。宇治の辨を可愛さうな老女だと思つて、目立たぬやうに蔭から出來るだけの親切を盡して居た。久し振で薫の君が宇治へ行つた時、もう季節は七月になつて居た。京の中は未だ秋の景色らしく見えない頃であるが、

音羽山の麓を通つて槇の尾を見ながら行く路の頰を打つ風はもう冷いものであつた。宮は常よりも一層勝つた悦びを見せて薰の君をお迎へになつた。お話の中に心細いお言葉が澤山まじつて居た。

『私の死んだ後に、女王達のことをお賴みして置かれるのはあなただけです。何卒何時迄も力になつてやつて下さい。』

かうお云ひになる宮のお心の內には、女王を娶らす氣にこの人をさせたいと云ふお思ひもないではなかつた。

『私が御一言でもそれを伺ひましたうへは忘れるもので御座いません。何かにつけまして將來の日がはかばかしく思はれません私ですが、生きて居ります限りは何時迄も變りのない心持を女王方に御覽に入れて行かうと存じます。』

と薰の君の云ふのを八の宮は嬉しくお思ひになつた。月が明くさして來る座敷で、宮は時時念佛を口にしながら昔の話などを懷しい調子

でお話になつた。

『この頃のことは知りませんが、宮中などでこんな秋の月夜に、御前でそれぞれ音樂の上手を揃へて合奏をおさせになるのを聞くのも面白いことですが、女御や更衣の局局で、それも他を凌ぐ一つの誇心から夜が更けて彈き出す琴や琵琶に實に好いと思ふのが多かつた。感情そのものの動きの目に見えるのが卽ち女なのですから、それに對すると男の方でも靜かにして居られなくなる。だから女は罪が深いのでせうね。自身の子でもさうです。男の子はさう親の心を搔き亂すやうなこともないだらうが、女となると、もう薄運のものに決つて居ると思ふ子にでも相當な氣苦勞を拂はねばならないやうです。』

宮は何時の間にか胸中の懊惱を語つて居られるのであつた。お道理なことであると薰の君は思つたが、話の表だけではさう突込んだお慰

めも云へないのである。

『總て音樂は男よりも女によく出來るものと思つて居るせいですか、馬鹿なことですが一向自分には何もこれと云つて出來ません。それで居て聽く欲ばかりが非常に發達して居るので御座います。』

と、こんなことを云つて、それから去年の秋の霧の深い朝に一聲聞いた女王の琴を是非よく聽きたいと日夜思つて居ると云ふことをもお話しした。親しくさせる初めにと宮はお思ひになつたか、御自身で姬樣の居間へおいでになつてお勸めになつたので、十三絃のほのかな音を姬樣は立てた。薰の君は深い興味を持つて聽いて居たが、その音は直ぐ止んだ。宮は自分の燒く世話はもういいであらう、これからの親しみを作つてゆくことは女王達の心に任すことにしようとお思ひになつた。それで佛前の行事にお入りにならうとして、

『あなたのことだから私が居なくなつたら屹度女王達の力になつて

下さるだらうと賴みに思はれます。もうこれが最終のお會ひのやうな氣がするので、愚痴なことを澤山云ひました。』

と云つてお泣きになつた。薰の君は身に沁み透る感をしながら、

『この月のうちには是非もう一度私はお伺ひ致します。』

と云つた。それから女王の居間の方へ行つて、また辨に昔の事を語らせて聞いた。西に傾いた月が明くさして、御簾の外に居る若い男の影をなまめかしく間の中に投げ入れた。姬樣達はずつと奧に居た。戀を露はに云ふのでもなく唯懷しみのある話振りで何かと男の云ふ時、姬樣は相當な答へを辨に取次いでさせて居た。匂の宮が非常に戀しく思つておいでになることを知りながら、自分がかうして近づいて行くのは疾しいやうな氣もするなどと薰の君は思つた。また自分の心はさまで躍らないものになつて居る。戀しいと思つて居るには相違ないが、この人から愛を酬いられようとすることに其れ程あせるので

もない、さうかと云つて忘れ得べくも思はれない。こんなにして交際つて居るのに最も好い女の友が他の人妻になつて了つては厭である。こんなことをさまざま思ひながら、まだ夜の明け切らない頃に薫の君は山莊を辭した。殘り少いものに御自身の命を見ておいでになつた御樣子の八の宮を思つて、公務の忙しい時が過ぎたらまた早く行つて見たいと薫の君は思つて居た。匂の宮も秋の末には紅葉を見に宇治へ行かうと思つておいでになる。さうした上で八の宮の山莊へ近づく方法はどうすればいいかなどと今から考へておいでになつた。絶えず手紙は送つておいでになるのである。女王の方では文字の遊戲とばかり解して居たから、熱のある言葉を度重ねて云はれても、壓迫を感じるやうなこともなかつた。快く輕い友情で折折は手紙を返しても居た。生の不安を強くお覺えになる八の宮はまた例の山の寺へ行つて念佛を專心にしたいとお思ひ立ちになつた。もう秋も少し更け

て居た。

『人生は誰も一緒に何時迄も生きて居られるものでない、一度は皆別れるのだけれども、自身が居ないでも安心の出來ることを見出して、おけば悲しさも自然諦められるものなのだが、あなた方は私の代りになる母樣もなければ兄と云ふやうなものもない。そんな心細いあなた達を置いて死ぬのは私も堪へ難いことに思ふ。併し目を上げて生死の大事を見ると、何時迄も私の心はそれにかかづらつては居られない。私はもう思はないことにする。あなた方は身を處する法を過らないやうにしないではいけない。私は生きて居る間からこの世のことはどうでも好いと思つて居たのだから、背を向けて行つた跡のことをかれこれと云ふのではないが、私一人のためでなく、死んだ母樣の名のためにも輕輕しいことは出來ないだらう。眞心からでない男の表面だけの情に欺かれてこの家を出てしまつた

りするやうなことはしないで置くが好い。因縁と云ふものを考へて自分は唯此處にかうした一生を送る運に決められた女だと諦めて暮したなら、この世は夢の間に過ぎてしまふ。また獨身で居ると云ふことが女のためには或は一番氣樂なことであるかも知れないから。』

父宮のかうお云ひになるのを聞いて居る女王達には、我身の遠い日のことなどは到底考へる餘裕もない。父に先立たれたなら、その悲しさに片時の間でも生命が保たれやうかと常々思つて居るのに遺言として今これをお云ひになるのを聞いては、唯だ心を限りもなく取亂すばかりであつた。明日寺へお行きにならうとする前日に、宮は彼方の座敷へお行きになつては暫くじつと詠めたり、此方の間へ來ては隅隅迄お見廻しになつたり、縁へ出て外を御覽になつたりなどしておいでになつた。自分は假の住居として見て居たこの小い山莊を家として生

先の長い人達がどう諦めて暮して行くであらうと、涙ぐみながら思つておいでになつた。念佛がお口に上つた。宮はまた相應な年をした女達ばかりをお集めになつて、

『女王達を頼む。おまへ達は出來るだけ彼達のことを思つてやつてくれなければならない。世の中に名の知れて居ない人達は、子の時になつてみじめなことになつても紛れてしまつて目立たないが、私などになると、人は何程の敬意をも持つて見てくれないにせよ、女王達は昔の陛下のためにお孫なんだから、見ぐるしい生きやうをさせては申し譯がない。貧しい生活をして行くと云ふことはそれは何の耻でもない。親が世に處して居たのと同じ樣に子が暮し行くのは、他から見ても、當人達の心にも快く思はれることだらうと思ふ。どんな場合になつても女王達を見苦しい穢いものにしてしまふやうなことはおまへ方がしないで居てくれなければならない。』

と諭してもおいでになつた。其日は未明に家をお出にならうとして、宮はまた姫樣達の處へおいでになつて、

『留守の間を心細がらずにお暮しなさい。慰みに琴や琵琶を彈いたりなどするがよからう。いくら思つても思ひ通りになるものでない、世の中は天命に任せて、さうさう心配をしてはいけない。』

と云つておいでになつた。心殘りをしながら顧みがちに宮は阿闍梨の寺へお入りになつたのである。二人の女王の心と心は抱き合ふやうにして、漸と心細さに冷え果てた氷ともならずに居た。

『一人だつたらどうでせうね。想像も出來ないのね。けれど、もしかまた私等の一人が先に死ぬやうなことがあつたらねえ。』

『厭なことをお云ひ遊ばす姉樣。』

こんなことを云つては泣きも笑ひもして居た。宮のお籠りが今日でおしまひになると云つてお歸りになるのを待つて居る夕方に、寺から

使が來た。

今朝から身體の具合がよくなくて歸ることが出來ない。風邪だらうと思ふので其手當をして寢て居る。私はふだんよりも一層切に歸つて行つてあなた達を見たい氣がするが仕方がない。

かう云ふお手紙を持つて來たのである。姫樣達は悲しさに波立つ胸を押へながら綿を澤山入れたお召物を急に拵へて寺へ持たせて上げたりなどして居た。二三日宮のお歸りがのびた。姫樣達は度度使を寺へ送つて御容體を聞かせて居た。

大した病でもない。唯何處と云ふことなしに苦しい。少しでもよくなつたなら明日にでも歸らうと思ふ。

かう宮は言傳してお遣しにもなつた。阿闍梨は御病床に附ききりで御看護をして居た。

『御大病ではおありにならないやうで御座いますが、もうこれが御壽

命の終りになるのかとも私は拜見します。女王方のことをもう決して御心にお掛けになつてはいけません。人には皆それぞれの定つた運命と云ふものが御座いますから、お案じになることは御座いません。』

かう云ふ風に阿闍梨は云つて、宮のお心に斷ち難いものを佛の敎によつてお斷たせしようと苦心して居た。

『今更お邸へお歸りになることも御座いません。この寺を大往生の御場所にお定めになるのが宜しう御座います。』

と云つて、歸りたくお思ひになる宮をお止めするのであつた。哀れな姬樣達は夜も晝も泣いて居た。有明月が空にあつて、澄んだ光に川面の見渡される時、鐘が幽かに鳴つた。山寺の使はこの時またない悲報を持つて山莊の門を潜つた。夜中過ぎに八の宮が御薨去になつたと云ふのである。姬樣達は不安の中に身を置いた自分達であると絕えず思ひながらも、この鳴神に擊たれるやうな悲しさに自分等が逢ふものとは今迄思つて居なかつた。淚も出ない、唯じつと俯伏になつて居た。底の知れない深い淵へ突落された刹那のやうな氣がするのである。宮の御遺骸さへも前にして居ないと云ふことがまた限りもない痛恨であつた。宮が前前から阿闍梨に御自分の御身體の最終の計ひをお托しになつて居たので、御送葬の萬事は寺で阿闍梨が行ふのであつた。唯一度お亡骸にお暇乞がしたいと望んだ女王等に、

『そんなことを遊ばしてはいけません。宮樣御存命中にも私がお止め致したので、終ひまでお逢ひにならうとは遊ばしませんでした。ましてそんなことを遊ばすのは、孝の道では御座いません。御双方が長くお忘れになる御習慣をこの際からお習ひになるのが肝心で御座います。』

と阿闍梨は心强い諭しをして居た。御病中のことを云ふ人の話の中

にも、こんなことで阿闍梨の恨めしい事が、姫様達にはあつた。薫の君は八の宮の薨去を非常な悲しみを有つて聞いた。もう一度緩りとお話の出來なかつたことが殘り惜しくてならない。もう逢へぬだらうと宮はお云ひにもなつたが、人生の脆さ頼み難さを平生のお言葉の底に置いておいでになる宮のことであつたから、それも耳に馴れて近いお別れをするとも氣が附かずに居たと、かへすがへす悲しく思つた。薫の君は山寺の方へも山莊の方へも弔問の品を多く贈つた。こんなことをする人が外にないのを見ても、姫様達は悲しい中にも薫の君が年來宮に盡して居た情誼が今更のやうに嬉しく思ひ知られるのであつた。世の常の子が親に別れた場合でも、その悲しさは譬へやうもないものであるのに、そのお薨れになつた父の宮一人の手で育つた女王達の今の悲歎はどんなであらうかと薫の君は思ひ遣りながら、また後の法要のための費用などを阿闍梨へ贈つた。山莊の方へも辨の手許

まで、其人への見舞のやうにして金を贈つた。始終僧を呼んで經を讀ますためには其れが要るから心を用ゐるのであつた。山莊の女達は若い二人の主人がお歎きの餘りに病氣をなさらぬかと案じない訣には行かない。有らん限りの力で慰めるのが日日の勤めであつた。木の葉が瀧のやうに落ちる頃である。姫様達の涙もそれ程の勢を作つて流れるのであつた。宮のお居間の御持佛の前には寺から今迄よく伺候し慣れて居た僧達が忌籠りをして哀れに經を讀んで居た。匂の宮の見舞がてらの手紙が度度來た。かう云ふ返事は殊にする氣が出ないので、何時も其儘にして置いた。源中納言には斯うでもないやうであるのに自分は疎外されて居ると云つて宮は恨めしがつておいでになつた。紅葉の盛りに宇治で詩會をお催しになることになつて居たが、折わるく向ひの山莊に黑い喪の雲が懸つて居るので思ひ止つておしまひになつた。四十九日がもう經つた。もの哀れな日の夕方に

宮はまた長い手紙を書いてお送りになつた。今日のやうなもの思はしい日にも猶ほ返事を見せてくれぬなら、それは餘りに同情を缺いた女性だと恨むであらうなどともお書きになつた。それを一緒に讀んで御最もなことであるから、今日はお返事を書くやうにと云つて大姫樣は頻りに妹に勸めて居た。父に別れて今日迄も生命にささはりもなくて生きて居られるもの、硯を引寄せて手紙などを書くやうになるものとは思はなかつたと、ふとこんな事が小姫樣の胸を悲しくさせて、涙が止度なく流れた。どうしても字が書けさうにないので、硯を向うへ突きやつた。

『私はとても書かれませんよ。かうしてね、私達が以前のやうに起きて座つて居ることが出來るやうになつたと思ふと、悲しみには終りがあると云ふ、淺薄な言葉通りに成つて行くやうで、其れがまた悲しくなつて來て、だめですわ。』

少女らしい泣聲を小姫樣は立てた。使が遲くならないうちにお返事を頂きたいと云ふ。今夜は泊つて行くが好いと云はせでも聞かない。大姫樣は氣を揉んで今日は代つて返事を書いた。

霧と降る涙の中の山里は籬に鹿ぞ聲合せ啼く

黒い紙に書いたので、どんな字が出來たか夜目にはよく見えないままに渡してやつた。雨もよひの空に木幡山の下を通る道は恐しい程もの淋しいが、氣の勝つた使は馬を早めて一時間餘りで二條院へ著いた。前から書き交して居る人の手でなく、それよりも一層整つた品の多い今日來た歌の字を御覽になる宮は、何方が姉で何方が妹の女王なのかと惑はれる心から、何時迄も何時迄も手を放たずに眺めておいでになつた。御寢所にお入りにならないので、

『お返事が待遠しくてお休みになれず、お返事がまゐるとまたあんなにして御覽になるのでお休みが出來ないとは、よくよく深いお思ひ

と云ふのでせうね。』

こんなことを云ふ女達もあつた。眠いから不平なのであらう。霧の深く降つた翌朝早く宮はお目覺めになつて、また宇治への御手紙が書かれた。

一緒に泣かうとする心はその鹿にも劣らないのです。自分はあなたのお逢ひになつた不幸のためにどれだけ心を痛めて居るか知れません。

こんなことも中にはあつた。父宮の世にお出でになつた頃は堅い楯のある心持で、若い男とも氣安く文を書き合つて居たが、この交りから思はぬ結果が引き出されたなら、身を過らせまいとあのやうに云つてお置きになつた言葉を無にすることになる、そんな悲しい目を見るのは厭である。かう云ふ思ひが小姫樣の心を占めて、二度目のお文には何時もの樣なお答もしなかつた。文に現はれただけでも宮は多くに

勝れた若い男でおいでになることが女王に察せられないことはないのであつたが、其人の戀人となることは自分の身に不相應なことであつる、自分はやはり山蔭の隱者女で一生を過すのが好いと思ふのであつた。薫の君と大姫樣とは親しい手紙を書き交して居た。中陰の明いた時にも薫の君は早速出て來た。東座敷の床を低くして喪中の姫樣達が居る間の外へ來て薫の君は辨を呼んだ。花花しいものが暗がりの中へ俄かに現はれたやうで眩しい氣になつて、姫樣達は薫の君が辨を通じて云ふ言葉にも答へることが出來ない。

『こんな作法だつた待遇をなさらないで、宮樣のお出でになりました時通り、私を心安い者としてお話し下さいませんか。私は女の方と餘りお交際を今迄して居ませんから、かうして取次を頼んで一つ一つ申し上げるやうでは言葉も續きません。』

と薫の君は云はせた。

『悲しい事に逢つて居ながら唯今迄無事で居りますやうですが、確かな心持などは何處へ參つたやら分らない程のはかない生きやうなので御座います。何となく生きて居りますことさへ疾しい氣が致しまして、明るい空を見ないために奧にばかり入つて居ります。誰方ともお話が出來ないので御座います。』

『何も皆御孝心の深いからのことですが、あなた方の御自身の方から晴晴しい御樣子をお見せになるのなら罪にもなりませうが、かう私がお勸めして暫くの間暗い處からお誘ひ出しするのですもの、惡いことではないでせう。何卒お話しなすつて下さい。私もお歎きをお慰め申したいと思つて來たのですから。』

と薫の君は云ふ。

『ああ仰つしやるやうな御親切からわざわざお出で下さつたので御座いますのに、是非直き直きお話し遊ばさないではお濟みにならな

いでは御座いませんか。』

かう云つて勸める女達もある。姫樣にもそれが解らないことはない。大姫樣は少し膝で前へ出た。薫の君は長い間心に戀の隱されてあつたこと、亡き宮が言つてお置きになつた事にも二人が結婚すると云ふ事が最もよくかなつたことであると云ふことなどを語つた。優しい男であるから異性に覺える恐怖などの起ることはないが、姫樣は斯うして居る今の自分が憐まれてならない。この人に一心に縋らうとして居るやうに見えないかとそれも恥しく思はれた。ほのかに一言位姫樣は答をして居た。それがいかにも思ひくづほれた人らしい調子であるのを、薫の君は哀れに思つた。黑い几帳が御簾に透いて見える奧の戀しい人の窶れた顏を想像すると涙が零れた。

『この頃のあなたのお心持に私はどれ程同情して居るか知れません。』

歎息するやうにかう云つた。

『眞實に何も分らなくなつて居るので御座います。』

と云つて泣くために姫樣は奥へ入つた。まだ引き留める程の打解けた間でないから、殘された薫の君はそのまま淋しく座つて居た。辨が代りに出て來て、近く見た悲しみ昔の日の忘れられぬ悲哀をいろいろと云つて泣くのであつた。唯一人自分の生涯の最も初めを知つた女であると思ふ心から、薫の君は懷しく思つてこの老女の前に居た。

『私はごく子供の時に院にお別れして、悲しいものは世の中だと深く頭に沁み込んだせいで社會に立つて人に引き立てられて居てもちつとも嬉しいとは思へない。かう云ふ靜かな處で宗教のお話などを伺ふことだけが樂みだつたのですがね、宮樣がお薨れになつてそれも無くなつたのです。女王さん方を私のほだしなどと云ふのは失禮なことですが、宮樣があんなにお案じになつたことですから、私が出來るだけのお世話をさせて頂かねばならないと思ひますか

ら、出家することなどは出來ません。併しあなたに聞いた話を思ふとまた一日も斯うして居る氣もありません。』

泣き泣き薫の君は云つて居た。老いた女は泥して甚しく泣く。薫の君の容子などがふと柏木の君かとも思ふ位似て居るのが悲しみを深くさせるのであつた。辨は今迄女王達にも一言でも薫の君の隱れた話を云つたことはないのであるが、老人の常であるから云ひ觸らしはしてゐないでも日夜親身のやうになつて世話をやいて居る姫樣達にだけは必ず支那錦の袋に封じられた話をも告げてないことはない筈であると薫の君は思つて、疚しくも恥しくも覺えるにつけて是非共その人と結婚しなければならないと云ふ心も添ふのであつた。宮のおいでにならない今となつては山莊の泊客となつて居ることも出來ないので歸らうとしながら、あの時これがもう最終の會見であらうと宮のお云ひになつたのを聞きながら、何故自分は御生前にもう一度お見

舞に來なかつたかなどと思ふと殘念でならない。お居間は質素なものであつたが、淸く閑雅にしつらはれてあつたのが、幾つかに仕切られて坊樣達の居所に使はれて居る。そのうち宮の靈位を山寺の方へ移すと云ふことであるから、此木の端のやうな法師の影も今に見られなくなるであらう。さうなつたら姫樣方は一層淋しい思ひを朝夕にするであらうと思ふと、薰の君は胸の痛くなるのを覺えた。この人と匂の宮との間には宇治の女王が第一の話題になつて居た。今は父宮が居られないので却て事むつかしくなく緣組も出來るであらうと匂の宮はお思ひになつて、頻りにお望みを云つてお送りになつた。もう文字の上の遊戲であると解釋して輕い交際をして居る訣には行かなくなつたので、小姫樣は短い返事をも書くのが躊躇されがちであつた。

月日は經つて行く。宇治の女王達は過去の身の上を思つても生がひのあつた記憶もないのであるが、宮のお在でになる間は世の中と云ふ

ものの恐しさ嶮しさは何もひたひたとは迫つて來なかつた。靜けさも長閑さも十分に味はれたのであつたが、今は靈のない自然のものにでも心が脅かされる。強い風の吹く日などはさうである。また知らない人が少し數多く來て案內を乞ふのを聞いても胸が轟いた。こんな侘しいことはないと二人で語り合つて居るうちに年の暮になつた。霙や霰の絶えず降る頃であるから、これ程の風の音はする習ひなのであるが、姫樣達は今年初めて山へ入つて冬を越すやうな心細さを覺えるのであつた。

『もう今年もお終ひになりましたわ。來年は今年のやうな年でなければとばかり思ひますね。好い春が迎へたい。』

こんなことを女達の云つて居るのを聞いても、姫樣達は望みもない事を云ふと思ふ丈であつた。向ひの山とは時時念佛に宮がお籠りになつたので其等の用事で人の往來することもあつたが、今は稀に阿闍梨

が訪ねて來るだけで何の交渉もなくなつた。何とも思はなかつた土地の者などが偶に御用をしようと云つて來るのすらも嬉しく思ふやうになつた。此時節のことであるから多く使はれる薪を山から持つて來る者もある。栗などをくれる者もある。阿闍梨の寺からは例年通り炭が運び入れられた。毎年その返禮に衣服や綿を宮が寺の者にお出しになつたのを思ひ出して、その通りにした。歸つて行く僧達や寺童が山に上つて行く姿が見え隱れに見える。雪が澤山降つて居た。姫樣達は緣へ出て見て居た。

『御出家を遊ばしても生きておいで遊ばしたら、寺から斯うして時時人も來たでせうにね。偶にはお目にも懸れたでせうにね。』

『さうですね。』

と二人は悲しさうに云つて居た。薫の君は新年になつたら用が多くて行かれないであらうと思つて俄に思ひ立つて宇治へ來た。雪の降

つて居る中を來てくれた京の客の志が姫樣も身に沁んで嬉しく思はれた。自身で命じて客座を作らせたりして居た。喪の家の者が使つて居るのでない客火鉢を藏つた所から出して拭いたり火を入れたりするにつけても、源中納言の來訪をお悅びになつた宮のお顏が人人の胸に浮ぶのであつた。逢つて話をすることは姫樣には未だ思ひ切らねば出來ぬ苦痛であつたには違ひないが、志が徹らぬかと云ふやうに思はれるのも辛くて御簾の近くへ出て行つた。打解けると云ふのではないが、前に比べると少しは言葉を續けた答も姫樣はするやうになつて居た。薫の君は懷しく嬉しく思はれるにつけて、これ以上のことが望まれてならない。自分の心ながらも斯うならうとは思はなかつたのに、是非もないことかも知れないなどと思つて居た。

『兵部卿の宮さんが私を恨んでおいでになるのですよ、私がお亡れになつた宮樣からお跡のことも承つたと云ふことをあの方に何か

の序でに申したことがあるか、また宮樣の當推量かも知れませんが、私が宮樣の邪魔をして居るとばかりお取りになるものですから、私もこんなことは進んでして好いかどうかとも思はれますけれど、宮樣の爲にお媒介をすることを承諾されました。此方では何故あの方をよくお思ひにならないのですか。好色男でいらつしやるやうにそれは誰も云ふでせうが、普通の好色男ぢやおありになりません。私は一番よくあの方の性格を知つて居ますが、淺く見えて底に深い情の流れが隱されてある方です。靡き易い女背き易い女、そんな人等のよくない關係が今迄多少あの方を過つて傳へたでせうが、お心に沁んだ戀であるなら、決して初めと終りをお變へになる方ぢやありません。もし似合つた御緣だとお思ひになりますなら、それについての萬端は私に任せて下さい。媒人は餘り遠くて足が續かないかも知れませんけれど。』

こんなことを薫の君はまめまめしく云つた。自分の事として聞かないでも好いのであらうが、親代りの姉として妹の緣の相談を受けて居ることとして、さて何と云つて好いか、大姫樣には解らない。

『あなたが何から何まで引き取つて仰せになりますから、私は却て何と申し上げていいか。』

と笑ひながら云つた。大やうな氣質が見えて快い。

『あなたのことを申して居るのぢやありません。あなたは雪を踏んで參つた今日の客の志だけが解つておいでになれば好いのだらうと思ひます。その話にはあなたは御後見の方としてお臨み下すつたらいいのだらうと思ひます。宮樣も確とは仰つしやいませんが、お二方の中のお一方に決めておいでになるやうです。併しそれも第三者には眞相が解らない問題ですが、唯今迄何方の女王さんが多く宮樣のお手紙に御返事をなさつて居たのですか。』

と薫の君は云つた。よく自分が一度でも宮のお文のお相手をしなかつたことである。若しさうであつたらこんなことを云はれた時どんなに恥しいかも知れないと姫樣は思つた。

『私はあなたのお返しを書かせて頂くきりです。その外の誰方からもお音信などを受けません。』

と云つた。

『さう仰つしやると却てさうぢやないかと云ふ氣がしないでもありませんね。私は人のお媒介をしながら先づ最初に自分の物を取らなければなりません。許して下さいますか。』

熱い息をしながら男はかう云つた。姫樣はもう何も云へない。時時かう迫つたことを薫の君は云ふのであつたが、女はよく氣が附かない風をしてしまふ。氣恥しくなつて、終ひには何時ものやうに故人の宮のお上ばかりが口に上るのであつた。

『この雪で暮れてはお歸途が大變なことになる。』

と家來は歸りを促して彼方で云つて居た。

『此處にお置きして置くことはお氣の毒でなりません。山の中のやうな靜かな所で、餘り人の來ない別宅が私にありますが、もしか其處へお移りになつて下すつたら私は安心しますが。』

こんなことを薫の君は云つて居た。結構なことである嬉しいことを聞くと、片耳に聞いてささやく女達もあるのを、小姫樣はそんなことは實現されるわけのものでもないと思ふのであつた。供の者は酒肴の馳走になつて居た。貰ひ著の移り香で騷がれた家從が、顋を巡つた鬚だけが立派な顏を見せて、何かと用をして居るのを見て、これが姫樣達の唯一の力とも思つて居る家の柱なのであるかと思ふと哀れでならない。家從を呼んで、

『どうですか、宮さんがお薨れになつてからは心細い氣がするでせ

う。』

と云つた。家從は目をしばだたきながら、

『宮樣にお使はれ致しまして三十幾年になるので御座いますから、このお邸を出ましては外には頼る木蔭も御座いません。』

などと云つて居た。宮のお居間だつた處を開けさせて見ると、間の中には澤山塵が溜つて居た。佛像だけには花が供へられてあつた。宮のお座だつた處の置疊などは取られて居る。出家を遂げたなら師弟の僧としてありたいなどとお話して居たことが思ひ出されて、

立ちよらん蔭とたのみし椎がもと空しき床となりにけるかな

と口誦みながら、薫の君が柱にもたれて居るのを、美くしく思つて若い女達は覗いて居た。日が暮れてから馬にやる秣を持つて來るやうに近い所の持地の支配などをさせて居る者に云つて遣ると、田舍侍が大勢それを運ぶのに附いて山荘へ來た。時時この山荘へ來て用を達し

て上げるやうになどとその人等に云ひつけて薫の君は歸つた。何時の間にか春になつて、阿闍梨の處から雪の消え間に摘んだと云つて、芹や蕨が贈られた。

『お父樣がお寺においでになつてね、其處から持たせて來て下すつたのなら嬉しいでせうね。』

などと、ゆかしい薄緑の春を前に置かれた白木の臺に見ながら姫樣は云つて居た。薫の君からも、匂の宮からも絶えず手紙が送られた。花盛りの頃に宮は去年の旅を戀しく思ひ出しておいでになつた。薫の君と其時一緒に川を渡つて行つた若い貴公子達が、面白く眺めた八の宮の山荘へもう行かれないことになつたなどと口口に云ふのをお聞きになつては、一層心がそそられるやうにお感じになつた。

今年は餘所に見じと思ふ心を知り給ふや、折りて髮にかざして愛づべき櫻とこそ思ひ候へば。

と云つてお遣りになつた。つれづれな時であつたから、小姫樣は、

折らむとか云ひ給ふ櫻は何處に咲くや見給ふべくもなし。墨染の霞に立てこめられたる家なれば。

こんなことを書いて返した。宮は恨めしくお思ひになつては、薰の君をいろいろに云つてお責めになつた。薰の君は可笑とは思ひながら、女方の後見顏をして、仇めいた噂などを宮がお立てになつてはなどと異見らしいことを云つて居た。宮もそれに牽制されておいでにもなるやうである。

『私の氣にしつくりあつた人が未だないのだから、こんな時代にすることは大目に見て居てくれなければ。』

とも宮は薰の君に云つておいでになつた。六人目の女を宮に婚したいと望んで居る夕霧の君が、宮の御冷淡なのを恨めしく思つて居ることは解つておいでになるが煩はしい舅の干渉が今から目に見えるの

で厭であると陰でお云ひになつて、強情を張つておいでになるのである。三條の宮が燒けたので尼宮も六條院へお移りになつたり、何かと事が多くて薰の君は久しく宇治へも行くことが出來なかつた。摯實な此人の心は匂の宮の懊惱されるのとは違つて、のんきに戀を考へて居た。戀人と定めて思つては居ながら女の心がうごくまでは、こちらから困らせるやうな要求はしないで居ようと思つて、八の宮の舊情を忘れない心の深さを知られるやうなことを念掛けてして居た。例年よりも暑い年で、誰も苦しさうなことばかりを云つて居る。薰の君は川の傍の山莊はさぞ涼しいであらうと思つて宇治へ行かうとした。日の出ない先にと思つて急いで來たので山莊へ着いてもまだ月が明るかつた。宮のお居間だつた所の次の座敷に通つて居た。姫樣達は持佛の前に居たのであるが、客座の近いのを避けて自身の居間の方へ行かうとして居る。女が隣の間に居ることは衣ずれの音でも知れる

ので、薫の君は胸のときめくのを覺えずに居られなかつた。此間の襖子の掛金の所に小い穴の一つあるのを薫の君は前から知つて居たから、その前に立ててあつた屏風を一寸引いて、襖子に顔を附けた。丁度其處の彼方側には几帳が立てられて居た。口惜しく思つて座に歸らうとする時、

『風がひどくて御簾が吹き上げられさうですから、其處の几帳を此方へ出して置いたら好いでせう。』

と云つた女があるのを嬉しく思つた。隣の間は几帳の長いのも短いのも皆御簾の傍へ集めて立てられた。薫の君の居る向う側の襖子を開けて姫樣達は居間へ行かうとするのである。一人の姫樣が出て來て几帳から御簾の外を覗いて居た。薫の君の供の人達が庭を彼方此方と歩いて涼んで居るのを見るのであつた。濃い青味のある鈍色の著物に黄樺色の袴を穿いたのが、花やかに見える。無論著た人の顔が

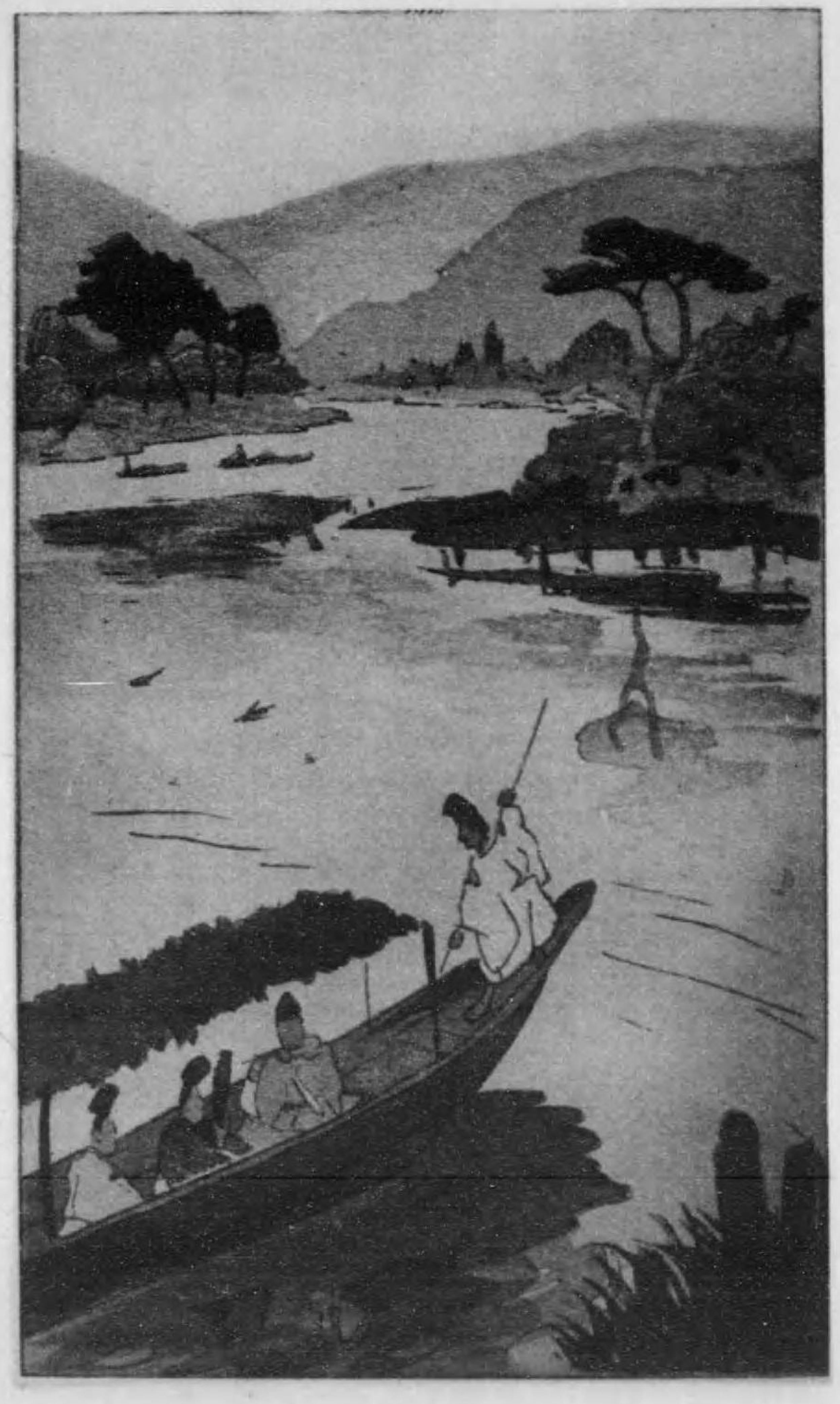
さう思はせるのに違ひない。手には珠數を提げて居た。背の高い、形の極めて好い人で、袿の著丈に少し短いかと見える髪は裾迄一筋のもつれもないやうに艶艶と麗しい絲筋を作つて垂れて居た。横顔は何と云ふ愛のある顔かと思はれる和い美くしさを持つて居た。陛下の女一の宮もかう云ふ方らしかつたと、ふと昔からの憧れの的になつて居る尊貴な女性を透見した記憶が呼び起されて、何とも解らぬ吐息を薫の君はそつとついて居た　また一人膝で歩き出した人がある。

『彼處の襖子の處がむきだしぢやないの。』

さう云つて此方を見た顔は、前の人よりも品が勝つて居た。限りもないなまめかしい美であつた。

『彼處のお座敷の方に屏風を立てて御座いますから。』

と云ふものがあつた。氣が濟まないらしく其人はまた奥へ入つて行かうとして居る。紫の紙に書いた經を片手に持つた手つきは立つた



人よりも痩せて居た。立つた人は何か解らぬが此方を向いて笑つた。

總角

幾年か聞き馴れた川風も今年の秋は耳に騒がしく響いて、山荘の女王達は淋しい悲しい思ひばかりを絶間なしにして居た。もう宮の御一週期も近いのであるから法事の仕度に懸つて居た。薫の君と山の阿闍梨とが表立つた其方の用は引受けて居た。姫様達はその日の布施に出す僧服、佛前の装飾品などを女達の異見通りに作らせたり、自身の手で拵へたりすることをして居た。山荘にはこんなために用意された金といつてもないのであるから、薫の君と云ふ人がなかつたなら、隨分みじめなことであらうと思はれる。この間うち始終この用事で家

來を往復させて居た薫の君は眞際になつて自身で出て來た。阿闍梨も丁度來て居た。姫樣は佛事の香机の飾りの總角を組絲で編んで居たらしい。御簾の下からそれらしいものが見えた。薫の君は佛に捧げる願文を作つたり、其日の順序書を拵へたりした筆のついでに、

あげまきの房ながやかに、
ながやかに戀のちぎりも結ばまし。
結びたる房は一つによりあひぬ、
いかで心も。

と書いて姫樣に見せた。また例のやうなことかと姫樣の眉は顰まつた。

もろげの命うきすくせ、
わが魂は泣き濡れぬ。
何か長きをちぎるべき、

涙の中に時は無し。

姫樣はかう書いて見せたのであつた。薫の君は吐息をつきながらじつとその紙を眺めて居た。自身の戀は何時云ひ出してもかう先を折られてしまふのであるから、思ふだけのことが云はれずに、匂の宮の小姫樣を夫人にしたいと望んでおいでになることについていろいろと語つた。

『宮さんはあんなに熱心に望んでおいでになるのですから、決して御心配になるやうな結果はあるまいと思はれますが、此方では何故お取合ひにならないのですか。御結婚後のお暮し事などは女王さんに負けをとらすやうな事を私はおさせしません。そんなことで取越苦勞をしておいでになるのではありませんか。さうだと餘り私を他人らしくお思ひになると云ふものです。ともかくもお考を露骨に云つて見て下さい。』

薫の君は極く眞面目にかう云つた。

『これ程もお世話に素知らぬ顔でなつて居るでは御座いませんか。他人らしい心で居るとお思ひになるのが分りませんわ。私はこんな暮しやうをして居る不幸な女ですから酸いも甘いも知つたやうに思ふ人があるかも知りませんが、何と云ふ頭の惡いのですか、これで居てぼんやりとばかりして居るのですから、お父樣がそんなことについて一切何とも御遺言にならなかつたのも、これではとても結婚などは出來ないと決めておいでになつたのかと思ひます。さうですから私はどうしても獨身で暮さうと思ひますの、妹は若くもありますし、この山蔭で朽木にさせてしまふのは餘り惜しい樣な人でもあるのですから、人並な身の上にさせて見たいと思つて見ることも御座いますの。』

云ふうちにもどうすれば好いか分らぬと云ふ風の見えるのを、唯二つ

三つの姉である人が筋を立てて賢く妹の將來を話すことも出來ぬのがもつともであると哀れに薫の君は思つた。あげまきの君が奥へ入つてから、また例の辨を呼んで薫の君は話相手にした。

『私の此方へ伺つた最初の間は、宮さんの興味の多い御法談を聞かせて頂くだけが望みだつたのですが、宮さんがもうお心細くなつておいでになつた御病氣の前に、女王さん方のことをお云ひ出しになつて、私に任すとお話しになつたものですから、私はその時から女王さんと結婚すると云ふ幻を書くやうになつたのです。また一人の女王さんのために好い縁を見附けるのが私の責任だと思つたのです。宮さんも無論その御意志だつたのに、お二人がお二人とも獨身で居たいやうなことをお云ひになるのはどう云ふわけなのでせう。何かお心に別な人が映つて居るためでないかと云ふ疑ひまでが起ります。私のことは人の評ででも分つておいでになるでせうが、戀と

云ふことは今までしたことのない人だつたのです。それがどう云ふ因縁ですか、女王さんのためにこんなに心を苦しめ拔かれて居ます。もうそろそろ世間の評にも上るでせう。宮さんの御遺言もあり、年が非常に違つて居るとか何とか不釣合なことがあるにしても、こんな間柄になつて居る者は皆結婚をするのが世間のならはしになつて居ることでもあるのですから、姫樣が私の妻におなりになるのは至當だと思ふ。』

などと自身のことを云つて、小姫樣と匂の宮の似合しい縁を强ひて避けようとされるのも意を得ない、二人ともきつと獨身の外の望みがあるのであらうから、知つて居るなら云つてくれと、しみじみと薫の君は云つて居た。並の女達はこんな場合に、客の心を迎へるために主人を譏つて見せ、償のない同情を見せたてやうとするものであるが、辨はそんな女ではない。心の中では大姫樣がこの人と結婚をし、小姫樣が匂

の宮に片附くことになつたら、どんなに嬉しいか知れないと思ひながらも、

『少し變りました御性質で御座いますからねえ、で御座いますから決して外の誰方樣のことを思召していらつしやると云ふやうなことも御座いません。お勤め致して居りますものも後から後からと外へ出て行きますやうな心細いお身の上をあけすけ申して、松の葉を頂いて生きて居る山伏でも、もう少し世渡りのことを考へますなどと、ひどいことを云ふ女も居りますが、姫樣のお心は其れでどうなるでも御座いません。小姫樣を世間的なお身の上にしたいとはお思ひになるやうで御座います。あなた樣の以前からの深い御親切はそれはもうようくお分りになつて居るので御座いまして、此頃の思召が小姫樣の方であればとお思ひになつて居るらしう御座います。小姫樣には兵部卿の宮さんからのお話がありましても、それは大し

た深い思召ではないと解釋していらつしやいます。』

と云つて居た。

『宮さんが後をお託しになつた私ですから、生きて居る限りは女王達のお力になるつもりなんですから、何方かが私の妻になつて下さると云ふことは、私のために同じことで、また小姫樣と結婚することをお許しにならうと云ふ姫樣のお心も嬉しいですが、感情と云ふものはもつと我儘なものですからね、今更小姫樣の方に思ひ直すなどと云ふことは到底不可能に思はれます。私等は世間の見得に花を飾るやうな夫婦にならうと思つて居るのではありません。心と心が解け合つて勞はられ合つて行きたいと云ふのが私の戀のあこがれです。妹などと云ふものも持たない孤獨のもの足りなさが一層そんな心に私をさせるのです。中宮さんは親身でおありになつても畏多い身になつて居られる方に、くだくだしい思ひごとなんぞを云

つて行けるものでもありません。尼宮さんは若若しくて私の姉のやうに思はれる方ですが、親と思ふと相當の遠慮もしなければなりません。その外の女性と私と云ふものとは全く交渉がないのです。懷しいものと知つて居ながら、恐しいやうな恥しいやうな氣がして近寄ることが出來ないのです。戀しいと身に沁んで思ふ人には、一層思つて居るだけのことが云へないで、心でばかり悶えて居るのです。自分ながら自分が憐れまれてなりません。小姫樣と宮さんとの縁談も悪いことなら私がこんなにお勸めはしないのですから、承知して下さると好いのですがねえ。』

など薫の君は云つて居る。辨には姫樣達の心を引き動したい望みはあつても、馴れ難い威のある二人の前へ行くと何一つ云はれなくなつてしまふのであつた。薫の君は今夜は此處で泊つて、姫樣とまた話をしたいと思つて居たから、日が暮れても落著いて居た。あげまきの

君は薫の君のかうした戀を負うて居ると云ふことを漸く重くるしく感じるやうになつて來た。長話の相手になつて居ると云ふやうなことなどは、前よりも一層避けたい氣で居るのであるが、戀を別にした殘りの薫の君と云ふものは、實際一家のために神とも佛とも云ひやうのない恩人なのであるから、疎い風は見せるに忍びない。かう思つてあげまきの君は今夜も逢つた。持佛の間の中仕切の戸を開けて、御簾の内側には屛風を立てさせて姫樣は居た。佛前の燈は明くともされてあつた。客の前にも燈を出しかけたのを、

『私は加減が惡くてぶざまな行儀で居るのだから、それが見えると却て失禮だから。』

と云つて姫樣は止めた。客の前には氣持よく調せられた菓子などが出されてあつた。細座敷の方では供の人達が馳走になつて居た。打解けるのでなく、さうして懷しさうに愛嬌のあるものの云ひやうをす

るこの女が、どれ程男の心に強い刺擊を與へて居るか知れない。御簾と屛風と云ふこれだけの隔てを取除ける力を罪と云ふ名にして考へて居る自身を薫の君は嘲笑ひたくもなるのであるが、して居る話は餘程遠い處に離れて居た。世間の出來事などを面白いやうにも身にしむやうにも語つて居た。姫樣は女達になるべく今夜は近い處に居るやうにと命じて置いたのであるが、薫の君の心をいい加減に忖度した其等の女は、主人の言葉は忘れた顏をして間の遠い隅の方で集つて寢て居た。佛前の燈を直しにくる者もない。あげまきの君は氣味が惡いやうになつて、低い聲で女達を呼んだが目を醒す者もない。

『失禮なのですが私少し加減が惡くなつて參りましたの、少し寢みまして夜明にもう一度お話を伺ひます。』

と云つて、姫樣は奧へ入らうとした。

『遠い路を來た者はあなたよりももつと疲勞して居ます。それでも

お話の伺へるのが嬉しくて忍んで居ますのに、捨ててお置きになつたらどんなに心細いか知れません。』

と薫の君は云つて、静かに屏風の端を向うへ寄せて中へ入つた。姫様は恐しくて逃げて行かうとしたが、まだ身體は其處に半分だけ殘つて居た。引き留められたのが口惜しくて、

『隔てのないお交際と云ふのはこんな意味なのでせうか。怪しからんお心ぢやないでせうか。』

と辱めるやうに云ふ様子が美くしい。

『隔てのない交際を少しもお知りにならないからお教へしようと思ふのです。怪しからんことと仰つしやつても、これは誰がして居ることですか。併し私は佛の前で誓言でもします。無法なことなどはするものですか。私は壓しつけ業がしたくなくて、あなたのお心からの許しを待たうと思つて居るものなればこそ、外の男に出來な

い愚物の眞似を今日迄もして居たのです。』

かう云つて、薄い燈の明りにあげまきの君の頬に亂れかかつた髪を指で拂つてやつた。近附いて見たこの女性の美は薫の君の心を狂はすばかりのものであつた。自身の戀の過去の氣長さが咀はしい。さうしてまた悲しくてならないやうに泣く女を見ては、こんな時でなくても戀の果の得られないことはない筈であると云ふ同情が湧いて來るのである。いい加減に云つて慰める外はなかつた。

『こんなお心とはゆめにも知りませんで、あんなにしてお親しく致しましたのね。あなたはこんな喪服を著た女に悲しい恥をおかかせになる方だつたのですね。』

女は喪服のやつれ姿を見られるのが堪へ難いやうである。

『さう仰つしやるので平生からのあなたのお心持をすつかり伺つた氣がして私は恥しくて物が云へません。喪服を口實になさるけれ

ど、私の戀は今初めてのことなんですか。そんなお咎めは受けないでも好い筈なんです。』

薫の君は三年前の秋の霧の朝に琵琶を聞いた時からの戀の心の來歴を語つた。恥しく姫樣は思つた。そんな心を持つて居ながらよくあれ迄眞面目立つた人と見せて居られたものであると思ふ事も多かつた。傍にあつた短い几帳を佛の方へ立てて、隔てのとれないままで寄添つて寢て居た。佛前の沈香が高く薫つて、樒の葉の匂ひの漂つた間の中の空氣は、人よりも佛に敬虔な心を持つことの深い薫の君に或考へを與へないわけはない。この喪服の脱がれた時、この人の心の少し折れ出した時にと自身の心を宥めて居た。嵐の音と庭の蟲の聲とが哀れに枕に響いて來る。宵寢をして居た風だつた女達は皆無言で點頭き合つてこの室を滑るやうにして出た。人生の無常なことなどの話される時、女も默つては居ずにもの哀れなことなどを云つた。女は

宮のお云ひになつたのはこんな事で、世にある間は心ばかりを堅く持つて居ても味氣ない目に逢はされる事もあるなどと悲しく思つて居た。もう明方に近くなつて來た。客の家來達が起きたらしい。咳拂ひの音などがする。續いて馬のいなくのも旅宿の朝のやうで、趣きの面白い氣が薫の君はした。襖子を開けて次の間へ出て二人は秋のつめたい空を眺めた。奥深い建物でもないので、檐に生へた忍草の葉に置いた露の白んで行くのが分つた。艶な二人の姿であると男は思つた。

『こんなにして、自然から受ける情趣と云ふやうなものを一緒に味つて、私等は慰め合つて行きたいと、それぱかりを私は思ふのです。』

などと懷しい調子で薫の君は云つて居た。漸く不安から逃れたやうな氣になつて、女も、

『こんなに恥しいお目に懸りやうをするのではなくて、物越しに話を

させて下さるのなら、私はもう少しも隔心なんぞ持たないんですわ。』
と云つて居た。河邊の鳥の羽叩きが聞えて鐘の幽かな音がした。明るくなつて行くのを女は苦しがつて、彼方へ行くことを男に勸めた。
『私達が清淨な身體で夜を明したとは誰も思はないでせう。けれどかうまでになつて居てそして永久に清淨な中で居ることも私は構ひません。私はあなたの意志をあくまで尊重して行かうと思ふのに、あなたは私に同情がない。』
こんなことを云つて、薫の君は出て行きさうにもしない。
『これからはあなたのお云ひなりに朝迄御一緒に居ることもあるでせう。今日だけは私の云ふことを聞いて私の傍から退いて下さいましな。』
困つた顔をして云ふ。
『後朝と云ふ感情を初めて私は味ひます。』

襖子の所まで女を送つて、薫の君は昨日居た客間へ歸つた。そして横になつたが眠られない。これ程烈しい戀をして居ると云ふ自覺がなかつたから、今迄のやうに悠長な月日も過して來たのであるなどと思つて、もう今は京へ歸るのも厭な氣がするのであつた。姫樣は、どう人に思はれて居るかと云ふことが氣になつて目も合はない。親の保護と云ふもののあつた日と違つて、誘惑がひたひたと肉迫してくることが思はれた。女達なども皆そんな方へ自分等を伴れて行かうとするものばかりであると云ふこともあさましくてならないが、それが世相であるかも知れない。薫の君を卑しい男とは少しも思はない、良人と許しても間違つたこととは思はない、父宮もその人が結婚を望んだならとは折折お洩しになつたことであるが、自分と云ふ者はどうしても獨身で居たい。自分よりも盛りの年で、あれ程の美を供へて居る妹を情の深い男に愛させたい。薫の君の配遇者にして自分はその後見役

をするのがどんなに嬉しいことか知れない。よしや自分が結婚する氣になつても、自分には後見役をしてくれる母も姉もあるのでないと思つてあげまきの君は泣いて居た。頭が重くてならないから寢られるかとも思つて小姫樣の傍へ行つた。夜中に人の話聲のするのを怪しく思つて姉の身を氣遣つて居た小姫樣は、あげまきの君の來たのが嬉しくて、手を伸して夜著を寢た肩へ掛けやうとすると、強い匂ひが鼻を打つた。家從の困り拔いて居た薫の君の著物の移り香と一緒のものであるとは考へる迄もなく知れた。變つたことの既に起つたことが思はれて、氣の毒で悲しくて自身も寢た顏をして物を云はなかつた。薫の君は辨に眞面目な挨拶を殘して歸つて行つた。妹も自分をどんな目で見て居るであらうと思ふと氣恥しくて、姫樣は氣分が惡いからと云つて其儘晝も起きないで居た。

『御法事までもう日がいくらもなくなりましたのに、姫樣が御病氣を

遊ばすとは折の惡いことで御座います。』

などと女達は云つて居た。

『紐は皆組みましたけれど、私ではうまく飾りが結べないのですもの、教へて頂戴な。』

小姫樣にかう云はれて、そつとあげまきの君の起きたのは、もう顏もはつきり見えない日の暮であつた。薫の君から手紙が來たが、

『今日は加減が惡くてお返事が出來ません。』

と使に云はせて居た。いよいよ喪服を脱いだ時にはまた二人の女王の涙は新しく流れた。同じ鈍色でも暗い色から薄い色に變つた姿は艶かしい。小姫樣に髮を洗はせたりなどして其匂ひの散るやうな美くしさに姉の女王は醉つて居た。男に惡く思はれる恐れはないなどと母のやうな心持になつて薫の君とこの人との結合ばかりが行手の光明として思はれるのであつた。薫の君は自分の心にある苦しみを

強ひた喪服のもう脱がれた頃だと思つて、結婚に惡い月と云はれて居る九月も氣に懸けずに山荘へ來た。お話がしたいと云はせても姫樣は逢はうとしない。人が何と思ふかを考へて欲しいと云ふやうなことを紙に書いて薫の君は遣つた。喪服を脱いだ際の心細さに胸が掻亂されて居て、氣を引き立てやうとしてもどうしてもお話の出來る心になれないと姫樣は書いて來た。薫の君は歎息しながら辨を呼んで語るのであつた。この人に迎へられて姫樣の山荘を出る日ばかりが待たれる女達は、姫樣の寢所へ薫の君を導かうと云ひ合せて居た。姫樣にはそれとはよく分らないが唯でないらしい氣振がそんな人等に見えるのが憎くてならない。辨はあんなに薫の君の手馴して居る者であるからと思ふと、誰よりも一番に信用して居る人にも油斷の出來ない氣がした。若しかの場合には小姫樣を自分の代りに置いて逃げよう。妹が劣つた容貌の女であつても、薫の君の性質としてさうなつ

た以上疎くするものでないことが分つて居る上に、顏の衰へた自分に幾倍した美くしい妹なのであるから、男の心を滿足させるに違ひない。そんな目に見えない手引がなくては男も戀人を變へて思ふことが出來ないであらう、それにあの人はもうその氣になつて居ながら、今迄の戀を淺はかに解されるのが厭さに、自分の云ふことに同意しないのかも知れないから、などと姫樣は今夜のことを心に構へて居た。自分にも覺えのある闖入者を見た時の弱い女の悲しい心持、それを強ひようとする自分の罪が思はれて、前からそれとなく妹に云つて置かうと思つた。

『お父樣は私等が淋しい暮しをして一生を送つても、人の嘲笑を受けるやうな結婚をするよりは好いとさう仰つしやつたのですから、お在でになつた間私等のためにお氣を揉ませ拔いた罪の深い私等は、せめて御遺言だけでもお守りしなければならないと思つて、私等は

貧しいことなどは少しも苦にはしないで居るのですがねえ、女達はそれを情のこはいものに云つて憎むでせう。困つたことですわねえけれど私にもねえ、あなたの若盛りをこの儘にして置くのが惜しい氣が頻りにして來たの、あなただけを恥しくない人の奥樣にして、それを私が心限り保護して上げて行きたいなどと思ふの、さうなつたら私に新しい慰めが出來るかなどと思ふの。』

小姫樣は何故姉がこんなことを云ひ出したかといぶかしくてならない。

『お父樣はあなただけに獨身で居るやうに仰つしやつたのぢやなかつたわ。あなた程賢くない私の方のことがなほ御心配で、それであれも仰つしやつたのですわ。そんなことを慰めにするなどとお云ひになるのが分りませんわ。私が何時迄も一緒に傍に居るより外にあなたの慰めはないと私は思つて居ますのに。』

恨めしさうにかう云つた。あげまきの君はそれがもつともに思はれるのであつた。

『皆がねえ、二人とも揃ひも揃つた變り者のやうに云ふものですから、私もときどきそんな風な考を起すだけよ。勘忍して頂戴。』

と云つて居た。日が暮れて行くが客は歸りさうにない。姫樣は困つた事だと思つて居た。辨が薫の君の言葉を取次いで來た。それから男の云ふのが最も理のあることであると云ふことをくどくどと云ふのであつた。どうすれば好い自分なのであらう。宮がお在でになつたなら、それが不幸なことになるにしても、親の御意志でした結婚だと思へば自分も諦めのつくことであるし、世間でも惡くは云はないに違ひない。自分の心でこの年下の男の妻になることがどうして好いことと斷定されやう。女達の勸めるのは遠い考のあることでもなんでもなくて、唯だ一時の花やかさが得たいためだけなのだからと、かう思

つて辨の云ふことは唯默つて聞いて居るだけであつた。小姫樣は戀と云ふことは紙に書いた詩と同じ位にしか考へて居ない處女であるから、辨の云ふこと、姉の悶えて居ることにも無關心で居た。喪服の名殘の薄鈍のお召をお著更へさせようなどと女達は騒いで居た。こんな狹い家では何處と考へても姫樣が行つて隱れて居る場所もないのである。

　薫の君は誰彼に口を入れさせずに、密かに、何時が初めであつたか分らないことにしたいと思つて居たから、姫樣が心から許さないなら何時迄待つても好いと云つて居るのを、忘れたやうに辨までが姫樣にも聞える處で其事についての用意などを外の者に囁いたりするので、姫樣は溜りかねて傍へ來た辨に話があると云つた。

『私は中納言さんをお信じし切つて居たのに、今日になつて私の困るやうな問題をお出しになるかと思ふと厭になつてしまふ。世間的の女になりたい私だつたら、こんなに云つて頂くのに好んで背くも

のぢやない。私は世間と云ふものとの間に大きい溝を置いて住んで居るのだから、自分ながらも心をどうすることも出來ない。小姫樣がね、唯私と同じ運命に甘んじて居ると云ふことは、餘り意味のあることのやうに思はれないのだから、私だとお思ひになつてあの方が縁を組んで下すつたらと思ふから、おまへからよくさう云つて頂戴な。』

姫樣は羞ひながらその手筈なども教へるのを、辨は哀れに思つた。

『私もさやうに度度申し上げるので御座いますがね、どうしても其氣にはなれない、兵部卿の宮さんが今でさへも恨んでおいでになるのが、さう云ふことをしたらどんなにお思ひになるか知れない。小姫樣と宮が御結婚になつたら、自分は兄弟として盡すと仰つしやるので御座います。それも結構なことでは御座いませんか。お二人がお二人共そんな善い男樣をお取り當てになると申すことは世間に

も餘りないことで御座いますよ。失禮なことを申し上げるやうで御座いますが、かうしておいでになりまして、終ひにはどうおなり遊ばすかと思ひますと、私共は悲しう御座いますのに、遠い遙かな末末のこと迄は分りませんでも、唯今の處さう遊ばすのが何よりの御方法だと存じます。宮樣の御遺言をお守りにならうと遊ばすのはお道理なことで御座いますが、それはこんなお似合の御緣のない時を御心配遊ばしてのお言葉に違ひは御座いません。中納言樣に結婚する氣があつたなら、それで一人だけが身を堅めることが出來るから嬉しからうとは私共によく宮樣の仰せになつたことで御座います。親御樣にお別れになつた方と申すものは、皆少し缺目の御座います緣にでも我慢してお附きになる位のもので、それを惡くなど世間は申しません。中納言さんや宮樣を男樣に遊ばすことの出來ますのは、態と拵へようとしても出來ることでは御座いません。佛道

を深くお究めにならうと云ふ思召でも、雲や霞がお食事の代りになるものでも御座いませんから、お考へ遊ばさなければ。』

辨はこんなことを云ひ續けるのであつたから、あげまきの君は泣き伏してしまつた。小姫樣もよくは分らぬながら姉を氣の毒に思つて寢た。あげまきの君は小姫樣の上から綺麗な著物を被けて置いて、自身は少し離れて橫になつた。辨は姫樣の云つたことを客に傳へた。何故かうまで人生と親しみを持たうとしない人なのであらう、父宮の感化がさうしたのかなどと思ふと、その人の厭世的な氣分と自分の氣が一致するものであるとも考へられて憎くも思はない。

『ではもう話だけでもしないと云ふ姫樣の決心らしい。今夜きりと私も思ふから寢所へそつと伴れて行つて下さい。お話をするだけだが。』

かう云はれたので、辨はその手筈を或朋輩等と云ひ合せて、外の女達を

早く寝させたり、そんな氣配りをして居た。十時過ぎから風が強くなつて來て、古い戸などはみしみしと凄じい音を立てた。こんな夜分には人の歩き寄る音なども耳には入らないであらうと思ひながら辨は薫の君を導いて行つた。姫樣は目を醒して居たので、ふと底い足音が耳に入ると直ぐ起きた。そつと次の室へ出ようとして、妹を振り顧るとよく寝入つて居る。濟まないことをすると思ふと胸が轟いた。一緒に隠れようと思つたが、もうその間がない。慄へながら次の室から見て居ると、男は几帳を上げて中へ入つた。溜らなく妹が可愛さうで、どんなに驚くであらうと思ひながら、屏風と壁の間へ入つて居た。薫の君は一人で寝て居るのを、待つ心があつてかときめいた心にもなつたが、その人でないことが漸く分つた。その人よりも愛くるしい美くしさは少し勝つた顔立ちかと思はれる。呆れた顔をして居るのを見て、この人は何も知らないのであることが分つた。氣の毒でもあり、

また隠れた人が心から恨めしくて、意地悪い戀がその人を附きまとふやうにもなる。この人も戀しくないことはないが、さうなるのはやはり誠がなかつたからであると、餘り淺はかに形に顯はれただけを全體の心として見られるのが本意でない。今日はこの人に指先も觸れないで別れよう、あげまきの君の心をもう一度よく見究めてからこの人に改めて戀をしても好いと、かう思つて、例の懷しい調子で身に沁むやうな話をして明した。出て行かうとする時には、男に戀のやうな悲しい心持を起させた。

『私が思ふやうにあなたも私を思つて下さい。氣の強い方のことを見習つてはいけませんよ。』

などと云つたのであつた。自身のしたことながら夢のやうで、近い過去の數時間の淡い心持になつて居られたことが不思議でならないのであるが、物足らないのである。恨めしい人の心をもう一度試して見

ようと云ふ思ひでそれを慰めて薫の君は客座敷へ歸つて寢て居た。

辨が姫樣の居間に來た。

『小姫樣は何處へいらつしつたかしら。』

とその人の枕元で云つて居る。小姫樣は恥しくばかり思はれる氣分の中で、昨日の言葉が思ひ出されて、薄暗がりの夜のことは皆姉が巧んだ事であると點頭かれた。朝の光に逢つて壁のきりぎりすは出て來た。妹の心が察せられて氣の毒であげまきの君は物が云ひ出しにくかつた。小姫樣も默つて居た。これからは姉であつても心の隙は見せられない。ひとり立の氣になつて居なければならないのであると、つくづく悲しく思つた。辨は客の傍で昨夜の始末を皆聞いた。

『今迄のおしむけはどうであつても、それ程私は恨しいとも思はないのだつたけれど、もう昨夜のあの方の仕打を見せられては私の心は掻き亂されてしまつた。死んでしまひたい氣がする。私は小姫樣

が氣の毒で朝迄慰めてばかり居て上げた。兵部卿の宮さんがあんなに戀しがつて居られる方だもの、小姫樣にはかうしたいと云ふ意志があるに違ひない。少しでも高い身分の人に連れ添ひたいのは人の情だから。辨さん、私はもう此方へよう伺はないよ。面目ないと云つてこれ以上のことがあるものぢやない。なるべくまあ人には云はないで下さい。』

こんなことを云つた薫の君は何時よりも早く山莊を出た。薫の君のために若し氣に入らない新妻であつたならと、よく事情の分らないあげまきの君は、こんなことで心配をして居た。晝頃に薫の君の手紙が來た。今日は自分が見るのでないとも、返事は小姫樣が書かねばならぬとも、さすがにあげまきの君は云ふことが出來なかつた。これに遣したあげまきの君のおとなしい返事を見た薫の君は、その人をもう恨めしさよりも戀しさの勝つた人にして居た。其晩を寢ずに遂げよう

とする戀を考へ拔いた薫の君は、まだ有明月のある頃に匂の宮にお逢ひしに行つた。繪に描いたやうな秋草の庭を前にして、宮はもう起きておいでになつた。階を上りながら宮と顔をお見合せした薫の君はそのまま階の中程に座つた。宮は欄干に身をもたせてお話しになるのであつた。いろいろの世間の話から、宇治の山莊の女王の上に宮のお話は移つて行くのであつた。おとりもちに骨を折らないやうに云つてお恨みになるのを、自身でさへも思ふだけのことが出來ないのにと思つて薫の君は聞いて居た。そして昨夜もそのことについて考へたのであつたから、宮が行きたいとお云ひになるのを、思ひ通りに事が運ぶやうに思つて嬉しかつた。こまごまと山莊でのさうした場合の心得などを薫の君は云つて居た。霧が出て來てそこらが冷かに見える。月は霧にかすめられて、木の下の暗く見える景色が山里のやうで、薫の君は戀しい人のあたりが偲ばれた。

『今度行く時はきつと一緒に伴れて行つてくれ給へ。きつとだよ。』

と宮はお云ひになつた。薫の君は其人に接近した後であるから、宮がお娶りになつてからのお心變りなどは決して起るまいと云ふ確信も一つは出來て居たのである。どうしても自分の心は妹の女王に移すことが出來ないから、それ程進んだおとりもちをしようとも思はなかつたことであるが、宮と小姫樣との結合を一方で遂げさせたなら、もう戀の身代りと云ふやうな淺はかなことは思はないで、女は眞面目に戀を考へてくれるであらうと、かう薫の君が思つて居るのを宮は少しも氣附かずにおいでになつた。

『むつかしい御奉公ですね。』

こんな戯談を云ひながら、一緒にお伴れする日の手筈などをお打合せして居た。二十六日は彼岸の終の日で好い日柄であるから、朝のうちから宇治へ宮と御一緒に出かける心づもりを薫の君はして居た。中

宮のお耳に入つては好くないこととも思ふのであるが、これ程のお思ひで居られるのを、見るに堪へないでお伴れするのであると自身の心に云ひ譯をして居た。目立つのを恐れて外の家の座敷も借らずに、山莊に近い處の自分の領地預りの人の家にそつと宮をお置きして、薫の君は一人で山莊へ行つた。中納言さんのおいでであると云つて家内中の者が俄に元氣附いて見える中に、姫樣達はうるさいと云ふ氣も起して居ないではなかつた。けれど、もうこの人の戀の對象は自分ではないのであるからとあげまきの君は思つて居た。小姫樣は中納言のために自分は人違ひだつたのであるから、もうあんな驚きを見ることもないと思ふのであるが、それ以來姉も賴みにならなく思はれるので、不安を全然持たぬわけにも行かないのである。客が人傳に何かと問答を交して落著いて居るのが不思議なことのやうに女達には思はれるのであつた。暗まぎれに馬で宮を山莊へお入れした。薫の君は辨

を呼んで、

『あなたに一寸賴むことがあるのだ。私は姫樣に見放された恥しい人間だが、小姫樣との緣もあのまま流してしまふ氣にはなれない。もう少し夜が更けてから、この間のやうにして、もう一度小姫樣の寢所の方へ伴れて行つて下さい。』

と云つた。何方でも實は好いのであると思ふ辨は容易く受合つた。

そして姫樣に客の云つたことを告げた。思ひ通りになつて行くとあげまきの君は嬉しく思つた。寢所へ通つて行く道にはならない座敷に居て、襖子を閉めた儘あげまきの君は薫の君に逢つた。

『一言あなたに聞いて頂きたいことがあるのです。大きい聲を立てると人が聞きますから、少しばかり襖子を開けて下さい。』

『低いお聲でもよく聞えます。』

と云ひながら、今を境にして妹の方へ行く人が、默つて居るわけにも行

かずに、言葉を殘して行くのに過ぎないのであるから、惜い風に思はせずに、夜の更けないうちに話を濟まさせる方が好いかも知れぬ、今初めて近い所で話をするのでもないからと思つて、あげまきの君は少しばかり襖子を開けて近く寄つて行つたのを、男は外から袖をとらへて引き寄せた。さうして思つて居る恨みを云ひ續けた。何故に襖子を開けたかと女は後悔しながら、賺して逃げるのが好いと思つたから、妹と自分を別の人と思はないで居て欲しいなどと云ふことを少しづつ男に云ふのが哀れであつた。宮はこの前薫の君の入つた戸口にお立ちになつて、敎へられた通りの女達を呼ぶ低い合圖の音を扇でおさせになつた。馴れたやうな導きふりを面白くお思ひになりながら、宮がもう彼方へ入つておいでになつたのを知らないあげまきの君は、どうかして其處へこの人を、情熱の固りのやうなことを云ふ男を遣つて寢させたいと思つて居る樣子が、をかしくも氣の毒にも思はれるので、薫の

君は、

『私は兵部卿の宮さんが是非伴れて行つて欲しいとお云ひになるのを、度度のことでお斷りが出來なくなつて今夜は一緒に來たのです。もう彼方でやすらかな夢を見て居られるでせう。賢がりの案内者はまだこんな冷遇をされて居るのです。みじめな笑物に私はなるのです。』

と云つた。意外なことを聞いた姫樣は頰に熱い涙が流れた。この人に妹を侮つて見られるやうなことをし初めたのは自分であると思ふと、堪へがたい悲しさも湧くのであつた。

『もう仕方がありません。私のしたことが惡ければ私は罪を受けます。唯だあの方は宮さんをお思ひになつて居られるのですから、さうなるのが天意のままのことだと思ひます。もうあなたも運命に隨つてもいい頃ではありませんか。襖子を中にお置きになつても、

私とあなたをもう誰が清い男女だと思つてくれませう。私に案内をお頼みになつた方の心にも私がこんなにして夜を明すものとは思へないでせう。』
薫の君は氣が昂つて來て襖子をも引破りさうに見えたから姫樣は恐しくてならない。この場合には宥めておくより仕方がないと思つた。
『運命と云ふものは目に見えないものですから、どれが眞實の自分の運命なのか、それに就いていいのか、私のやうなものには分りません。あなたをお恨みするのでも御坐いませんけれど、唯今承つたことがどれ程私の心を掻き亂して居るか知れないんですよ。好いことか惡いことかはともかくもねえ。私は眞實に頭が變になつて居ます。諦めもつきまして、この感情の靜められました時に、あなたの仰つしやつて下さる方のことを、もう一度よく考へて見ますから、今晩は私を彼方へ遣つて下さいまし。動悸が高くなつて居ますから暫く休

ませて下さいまし。』
とあげまきの君は云つた。道理のあることを云つて居るので、男は氣恥しくなつた。佗しいと思ひ詰めた樣子がまたない美くしいものであることも男の性の欲を押し靜めさせた。
『女王さん。私があなたを思ふ戀がどれ程深いものであるかは、今になつてもあなたのお言葉に隨つて私の意志を立てようともしないのでも見て下さい。私はもう何も要求しません。せめてもう少し話だけでもさせて下さい。』
と云つて薫の君は抱いて居た身體を放した。さすがに逃げても入らないのを哀れにも優しくも男は思つた。
『これで私は滿足して居ますから、何も御心配なさらないが好い。』
と云つて居た。橫になつた耳元で水の音が泣いて居た。鐘も聞えた。宮はまだ小姫樣の處からお出でにならない。ほのぼのと白む頃に出

て行つた薫の君はまたとない和味を持つた女の樣子が忘れがたく心に彫りつけられて居た。女達は小姬樣の方へ導いた中納言の外に此處にも中納言の居たことに驚いて、もう一人若い男がこの家で夜を明したことを初めてさとつた。明けきらぬうちにと云つて車で歸る道を宮は遠くもお思ひになるのである。二條院へ著くと女達は薫の君の顏を見て笑ひながら、

『結構な忠義を遊ばしますね。』

などと云つて居た。宮は直ぐに手紙を書いておいでになつた。山莊の姉妹は夢の中に居るやうな朝の氣持だつた。いろんな計ひが皆自分に知らさないで姉の心一つでなされたとして小姬樣は恨んで居た。顏も見合せないやうにするのが道理にも思はれるのであるが全く今度のことだけは知らずに居たと云ふ云ひ譯もあげまきの君はよう云はないで居た。女達はあげまきの君が何も承知して居るらしいのを

怪しんで居た。手紙は姉の女王が開いて妹に見せた。小姬樣は返事を書かうともしない。自身から親がつたやうな手紙を出すのも恥しく思はれて、あげまきの君は宥めたり賺したりして漸く新婚の人の書く朝の手紙を妹の手で書かせた。匂の宮は今夜も昨夜の案内者をお誘ひになつたが冷泉院にやむをえぬ用事があると云つて斷つた。宮は冷靜な男であると憎いやうにもお思ひになつた。山莊は新たな婿君を迎へる爲に今日は綺麗にしつらはれてあつた。遙かな道を急いでお出でになつた宮が、お著きになつたと聞いた時あげまきの君は姉心に嬉しく思つた。小姬樣は心のない人のやうになつて、姉のするままに化粧されたり着物を著せ更へられたりして居た。そして、もう何時の間にか今著た赤い單衣の下重ねの袖が涙で濡らされて居た。姉の女王も泣いて居た。

『私はね、とてももう長く生きられない氣がするものですからね。生

命のある間せめてあなたのために盡して上げたいとばかり思ふの、そんな氣苦勞ばかりをして居るの。辨やなんかがやたらに結婚を勸める中にもね、經驗のある人の云ふことだから眞理もあるやうに思はれてね、あなただけはさうさせようかと云ふ氣がしたのですわ。けれどもまた二人が獨身で行く方があなたの爲に氣樂かも知れないなどとも考へたりしたの。今度のことは私は何の端くれも知らなかつたことですがね、かうなつてしまつたと云ふのはよく人の云ふ運命なのでせうからね。嬉しいやうにも氣の毒なやうにも私は思つて居るの。あなたがもつと氣が靜まつた頃に私の知らなかつたわけをもつと委しく話しますわ。私を餘り恨んではいけませんよ、知らないものを恨んではあなたが罪になるから。』

髮を撫でつけて遣りながらかう云つた。小姫樣は默つて居たが、さすがに姉の云ふことを無理とは聞いて居なかつた。結婚した自分のために姉の苦勞がまた殖えるのでないかと思ふのが限りもない悲しみだつた。闖入者に驚いた夜の顏さへも云ひやうなく美しかつた人が、嫁君らしく繕はれた姿は宮の戀をいよいよ深いものにおさせするばかりであつた。遠い路が二人を隔てて居ることをお思ひになると樂しいお心が何かで刺されるやうにも宮はお思ひになつた。いろいろと遠い日のことまでを云つて宮は戀人にする約束のあらん限りの言葉をお盡しになるが、心の動くやうでもない女を、どうすれば好いのかと宮はお思ひになつた。どれ程深窓の中にある人だと云つても、親とか兄とかがあつて、世間との交渉のある人はもう少し世馴れて居るであらうが、さうでないこの人は恥しいと思ふ心ばかりが總てを覆うて、一寸した返辭をしてもそれを田舍めいた女の云ふこととさげすまれて思はれるかと遠慮して居るやうであつた。美くしい二人の女王の中でもこの人は高華な美を多く持つた人なのである。三日目の夜

は祝の餅を調へて置くものであると女達が云ふので、あげまきの君は居間でそれを作らせて居た。よく勝手が分らないのと、後見役らしく大人振つてかうした差圖をして居るのとが羞しくて、姫様は顔を赤めて居た。妹思ひの情の深い飽くまで女らしい人である。薫の君から辨の處へ、

今夜は伺つてめでたい式の御用でも致したいのですが、あやにくまた加減が惡くて參られません。

と云ふ手紙を添へて、衣櫃を幾つも送つて來た。女達へと云ふのであつたが、女王のにと思つたらしい二重ねの裝束は美くしいものであつた。下に重ねた紅い單衣の袖に、例の心を歌つた三十一字が書いてあつた。宮はその日參内されたが、宮中から出にくい具合であるのに氣を揉み拔いておいでになつた。さうともお知りにならない中宮がお傍へお呼びになつて、

『あなたは獨身で居て、いろんな批評を立てられて居るのをいいこととお思ひなの。少し氣を附けて落著きなさいよ。陛下も御心配していらつしやるのですよ。』

とお云ひきかせになつた。宮中においでがちなのをお云ひになるのである。宮は吐息をお吐きになりながら休息所へ行つて、其處から山莊へ手紙をお書きになつた。悲しいやうな泣きたいやうな氣でじつとその儘おいでになる處へ薫の君が來た。戀しい人に縁りのある人だと思ふと何時よりもまたなつかしい氣がおしになつた。

『どうしたら好いだらう。もう暗くなつてくるのに出られさうにないから、私は氣が氣ぢやないんだ。』

とお云ひになつた。薫の君は宮が新妻にどれ程の愛情を持つておいでになるか、もつとよくお試ししたい氣がして、

『たまたま御參内になつたのですから、直ぐまたお出になつては一層お二方の御機嫌がお惡くなるでせう。私は先刻中宮さんがあなたにお小言を云つていらつしやるのを、臺盤所の方で聞いて居まして、顏色が變りましたよ。私の今度したことをもう中宮さんはお知りになつたのではないかと思ひましたから。』

と云つた。

『いろんなことを告口する人があるんだね。私はこの身分が厭になつた。戀しく思ふ人を見に行くことの出來ないやうな束縛を受けなければならないこんな身分が厭でならない。』

と思ひ込んでお云ひになるのがお氣の毒で、

『どうせもう惡くお思はれになるのなら、一緒ですから今夜は思ひ切つて行つていらつしやい。私があなたの代りになつて、中宮さんが何とか仰つしやつた時にはお云ひ譯をして居ます。』

と云つた。宮は氣がお急きになつて馬でお出かけになつた。薰の君はお宿直をして居た。中宮のお側へ行くと、

『兵部卿の宮さんはやつぱり出たつてね。眞實にあれだから困つてしまふ。陛下がお聞きになると私がよく云つて聞かせないで居るのだと屹度お云ひになると思ふと、私は苦しくつて仕方がない。』

と中宮は云つておいでになつた。お生みになつた宮方が皆大人になつておいでになるのに、中宮はますますお若若しい御容子でおいでになつた。女一の宮もかうでおありになるのであらうが、どんな日が來たならこれ程にせめて近づいてお聲だけでも聞かれるのであらうと、薰の君は自身が憐まれた。山莊では薰の君がことごとしく云つて來た今日であるのに、夜の更ける迄宮がお出でにならずに、そのうちに來られないやうなお手紙の來たので、いよいよ落膽して居た。夜中過ぎになまめかしい姿で宮がおいでになつた。誰の心も嬉しさに蘇つた

やうになつた。小姫様も今夜で宮のお心が分つたやうに思つて、慕しい心も初めて覺えられるのであつた。若い女の盛りの高華な姿はこの外にもう一つとないもののやうにも見える人であるから、美人と云ふ美人を見盡した宮のお目にも、逢はない前に想像したのにも勝つた戀人であつたと滿足をお覺えになつたのは道理である。この美貌の姫様をつまらない男の妻にさせたのであつたなら、どんなに口惜しい事か知れない、嬉しい緣が結ばれたものであると云つて、女達はまたもう一人の女王の獨身を押し張らうとするかたくなさを譏つても居た。もう何も似合はない年になつて居て、薫の君から贈られたけばけばしい衣裝を著飾つた女達は一人として見よく思はれるのはない。姫様は、自分ももう衰方の人である、鏡で見ると顏などは以前から見ると痩せた、この美くしい著物の似合はない女達も各各心の中に入つて見たなら、一人も自身をそれ程惡いとは思つて居ないに違ひない、後ろから

どう見えるかと云ふことも知らないで、拔け上つた額に髮を被せて、白粉をつけて、それで滿足をして居る、自分はまだあれ程にはなつて居まい、目も鼻も人の形らしく附いて居ると思ふのも、これも身びいきの心が思はすことかも知れないと、こんな事を思ひながら女達の居る方を眺めて居た。美くしい薫の君の妻になることはいよいよしがたい事である、もう一年か二年したらどんなになつてしまふか分らないほど自分は衰へてしまふに違ひないのだからなどと思つて、細くなつた手首をじつと見て居た。宮は此處へ來て居る時間を盗むやうにして來て居るやうにお思ひになつて、始終こんな苦痛をしなければならないのかと、苦しさが胸いつぱいになつてお思はれになつた。中宮の今日お云ひになつたことなどを女王にお云ひになつて、
『私は胸いつぱい思ひながらよう出て來ない時もあるでせうから、そんな時にあなたは氣を使つてはいけませんよ。私は夢にもあなた

に薄情らしいことをする氣がないのだから、そんなのだつたら捨身になつて今夜なども出て來ないで居たでせう。眞實に疑はないで下さい。私はどうかしてあなたを近い所へ呼びたいと思ふ。さうして毎日一緒に居たいと思ふ。』

とお云ひになつた。來られないこともあらうとお云ひになるのは、かねて聞いて居るお浮氣の多いためなのであらうと女は淋しく思つた。夜の明けて行く川の景色を二人で眺めて居た。霧が面白い趣をして一面に降つて居る。例の柴船がその中を通うて居た。美くしい人であると思つて、また朝の光で男は女を見て居た。水は懷しみもない高い、さうして單調な音を續けて居た。霧が晴れて行くのに隨つて古い穢い宇治橋が見えだして來た。

『こんな所に長い間よくあなたは辛抱して住んで居ましたね。』

かうお云ひになる宮は涙ぐんでおいでになつた。

『そんなことをお聞きすると恥しくなりますわ。』

と女は云つて居た。またない美くしい艶な姿でおいでになる宮が、この世ばかりでない長い戀の約束をおしになるので、思ひも寄らずにかうなつたのではあつても、知つた中納言の妻になつたよりは好いことであるやうに女王は思つた。あの人は戀しい人が自分でないのである上、あの冷いやうな澄んだ調子がどうしても親しまれないなどと思ふのであつた。宮が長くおいでにならない日が來たら、心細いであらうなどと思つては、何時の間にか心をこの人のものにされてしまつたかと自身をあさましくも思つた。供の人達が咳拂ひなどをしてお歸りをうながして居る。宮が全く明るくならない間に京へ歸らねばならぬとお思ひになる心はあわただしい。心にもない阻隔を氣にしないやうにとばかり宮は繰返して云つておいでになつた。

『ねえ、決して中絶のする戀ぢやないのだから、好いこと。』

『私のね、中絶させたくない心だけが永久にあなたをお待ちして居るのでせうね。』

別れを悲しむ樣子が女にも見えた。宮は途中で宇治へ引き返さうと何度お思ひになつたか知れない。これからやや長い間宮はお外出がむつかしかつた。戀しい宇治へ手紙は一日のうちに幾度と云ふ程もお送りになつた。あげまきの君は一人で心を苦しめて居た。自分がさうと云つたなら、一層溜らなく妹が悲しむであらうと思つて默つて居るのであつた。自分にもこんな風の物思ひを加へるのは厭であると心は淋しい方へばかり進んで行つた。薫の君は山莊の人の心が思ひ遣られて、自分がしたことで苦勞を掛けて居るのが氣の毒で、絶えず宮の御動靜をそれとなく見ようとして居た。宮が宇治へおいでになることの出來ないために、うつうつとして氣を腐らせておいでになるのを見ては安心もされるのであつた。九月の十日頃になつた。山の

紅葉の見頃なのを思つて、或日の夕方に薫の君は、

『郊外へお出になりませんか。』

と云つて、宮をお誘ひした。宮は嬉しく、お思ひになつておなじ車に乘つてお出掛けになつた。遠く山路へ入つて行くにつれて女の此頃の心持が痛切に思ひやられて、宮はそのことばかりを口にしておいでになつた。冷く雨が降り出して秋の果ての景色が凄いやうな日であつた。今まで零し合つて居た女達は限りもない喜びを見せて客坐を拵へて居た。此頃は古い人の姪などで呼び寄せられて居る若い女も三人か四人あつた。あげまきの君は宮のおいでになつたことを嬉しく思ふのであつたが、もう一人を苦しい客と思つた。併し女に對する男と云ふものは皆薫の君のやうに純潔な心で終始しようと思つて居るものでないと云ふことが、宮のお行ひになつた事ででも證されて居るのであるから、感謝しても好い人だと知つて居た。宮を出來るだけ鄭

重におもてなしして、薫の君は内輪の人として心安く見ながら、まだ今日も客坐敷に通したきりで置かれてあるのを恨めしく薫の君は思つた。あげまきの君もさすがに氣の毒に思つて、居間へ通して襖子越しに會つた。

『私はどうしても後へ歸つて行くのは厭です。そんな情けないことはさせずにおいて下さい。』

と薫の君が云ふ。あげまきの君はこの人の心持をもう底まで知つて居るのである。身を任すのが順當のこととも思ふのであるが、妹を見て戀する身の苦しさがしみじみ憐まれる此頃なのであるから、これ程心の合つた中が夫婦となつたために恨んだり憎んだりする日の來るのをも、けたい、何時までもかうして居たいと思ふのである。宮は屢おいでになるかと云ふやうなことを薫の君が聞くと、妹は味氣ないあしらひぶりをされて居ると云ふやうな答を女がするのを、姉心にごん

なに氣を揉んで居るかと氣の毒に男は思つた。自分が宮の御擧動に絶えず注意を拂つて居ることなどを云つて居た。戀は語つても今日は何時も程烈しいことは云はなかつた。

『私は自分のことぢやないのですがね、非常に頭をつかひましてね、身體もふだんのやうぢやないのですよ。さつぱりと致しましたらまたゆるりとお話を伺はうと思つてます。』

と女は云ふ。憎いやうなよそよそしさは見せぬが、襖子の掛金はちやんと掛けてあつた。この人の心を破るやうなことはしたくない、自分に同情の起る日の來ないこともあるまい、外の男に行つてしまふことのないのは知れて居るのであるからと、火のやうな戀をして居てもこの人の氣はかうのんびりとしたものであつた。襖子だけは除いて話したいと責めると、

『私の顏がこの頃痩せてをかしくなつて居るものですから、あなたに

疎ましがられるかと心配なのはどう云ふわけなのでせう。』と云つて、低い笑聲を立てた。その和味がどれ程また男の心をやるせなく思はせたか知れない。

『そんなお心に釣られて、私は實際どうなるのだらう。』と悲しさうに云つて居た。宮はこんな旅人のやうな夜を薫の君が明して居るとはゆめにも思つておいでにならなかつた。

『中納言が主人方の氣になつて、私のやうなきぬぎぬの悲しみなどは通り越した氣で朝寢をして居るのが羨しい。』

かうお云ひになるのを女王は不思議に思つて聞いて居た。漸くの思ひでおいでになつてはまた直ぐお歸りになるのであるから、宮は堪へ難い悲しみをお感じになるのである。女王は疎まれ者の名を立てるかと歎いて居る。苦しい戀をする人達である。京へ迎へようとお思ひになつても、よく思へば置所がない。六條院は一方に夕霧の君が住

んで居て、あれ程妻に持たせたがる六の君も居る處なのであるから、さうしたことをした時、どれ程恨みを招くか知れない。許し難い好色者のやうに自分は云はれて、終ひには陛下や中宮などにも惡く告げられて、戀人を六條院からまた外へ移さねばならないことになつたら、それから先はどうすれば好いか分らない。唯だ普通に思つて居る情人は宮仕への女として二條院へ置いておいてもさしつかへないが、さうは出來ない。自分についての陛下の思召通りの世が來たなら、女御や更衣と呼ぶ以上の位にこの人を置いて眺めようと思ふのであるから、輕輕しいことは今からゆめにもさせられない、などと今の宮はこの人が生命の總てであるやうに思つておいでになるので、かうもいろいろに思つてお心が痛むのであつた。薫の君は火災後の三條の宮が建ち上がつたならあげまきの君を迎へようと思つて居た。宮がこんなに隱れてお通ひにならねばならない苦しさをお察しして、自分から中宮に

この御結婚のことを申し上げたなら、一時はそのために宮がお咎めをお受けになるやうなことはあつても、それからのちの山荘の女王は尊親から承認をうけた宮の夫人なのであるから、こんな夜眠る間もないやうなあわただしい逢ひやうをされないでもいいのであると、かう思つて、女王を人目に恥しくない程立派に繕ふことを自分はせねばならない、自分の外に誰がそんなことをするものがあるかと思つて、この季代りにも新築の家の用に出來て居た坐敷の帳や裝飾品を使つてくれと云つて宇治へ送つた。女用の衣服を乳母に差圖させて多く作らせたのも一緒に持たせて遣つた。十月の初めで網代の氷魚の漁期であるから、それを見るのも面白からうし、まだ紅葉も殘つて居るからと云つて、薰の君は匂の宮に宇治へおいでになることをお勸めした。宮に直接お仕へして居る役人の外には、親しくお思ひになる若い公達だけをお伴れになつて、微行でお遊びになるお積りであつたが、何時の間に

か事が大きくなつて、夕霧の子の宰相の中將もお供に加はることになつた。高官はその人と薰の君だけであるが、並の役人の數は多かつた。女王の山荘へは必ずお寄りになることと思つたから、その用意をして置くやうに云ひ、前年の花見の時に伺つた若公達などもいい機會に思つて行くかも知れないからと、こまごま薰の君は注意して遣つて置いた。山荘の人は御簾を掛け替へて、家中の掃除をして、庭の石の間に溜つた紅葉の朽葉も殘らず綺麗にさせておいた。菓子や肴、給仕に出る男なども薰の君が京から遣してあつた。船で川を上り下りして遊んで居る一行の船にはゆかしい管絃の音も載せて居た。どの人が宮でおありになるかの見分けは附かないが、紅葉で屋根を葺いたのがお召船であるらしい。御微行と聞いてもこれだけの人がかしづくお勢の花花しいのを見ては、たとへ年に一度來る彦星のやうな男でも、こんな方を主人の良人にして置くことに越した嬉しさはないなどと、外を覗

いた山莊の女達は思つた。詩をも作つてお遊びになるお積りでお供には文章博士も交せてお伴れになつたのである。海仙樂と云ふ曲を合奏して若い人達の面白がつて居る中に、宮は山莊の人の心ばかりが思ひ遣られて、恨めしく思ふであらうと、何も身につかぬやうな氣でおいでになつた。少し皆の落著いた頃を見て山莊へ行かうと薫の君は思つて、さう云ふ手紙を書いて送りなどして居た處へ、夕霧の君の上の息子の衞門督が中宮の仰せで供奉に加りに來た。この時代のこの宮の宇治遊行と云ふことは後の書きものにも殘るのであるから、お供の中に高官達の少いのは宜しくないと云ふ母宮の思召である。その人の外にもまた一緒に來た並の役人が多かつた。戀する二つの若い心はこれで總てを醒されてしまつた。來た人は何も知らずに夜の明ける迄醉ひ騒いで居た。翌日になつてまた中宮太夫が幾人かの人を誘つて出て來た。宮は殘念でお歸りになる氣にはなれない。女王には

手紙を書いてお送りになつた。お思ひになる丈の細い情緒を長くお書きになつたものであるが、人目を憚つて返事は遣さなかつた。自分のやうな者が榮華の子と戀をして物思ひのないわけはないなどと女王は一層味氣ない心を戀の上に持つやうになつた。常の時はおいでの間の長いのも道理であると、思ひ遣りも諦めも出來て慰めて居た心が、目の前をかう素氣なく通り過ぎやうとする人を見ては、恨めしくも口惜しくも思ひ亂されるのであつた。宮はあまりものもお云ひにならずに同じ景色ばかりを見廻しておいでになるのであつた。木立の一むらかたまつて黒く見える處が戀しい人の山莊である。松に這ひかかつた葛が綺麗な色を見せて居た。薫の君も前からあんなに云つて置いて行かないのが濟まない氣がして愁はしく思つて居た。若い人達は花盛りだつた山莊の庭を思ひ出して、女王達が唯二人で殘つて居ることなどを噂した。宮と薫の君の戀人であると知つた人もある

やうである。知らない人も多い。若い女はこんな山蔭に居ても人の忘れないものである。
『非常な美人ですつてね。』
『琴が上手だとか云ふことです。』
などと口口に云つて居た。中宮太夫は全盛期の八の宮を知つた人であつたから、孤子の女王の淋しく住んで居る家を遠目に見て涙を零して居た。宮も同じ所を涙の溜つた眼で眺めておいでになるのを見て、御關係を知つた人などは同情して居た。遠くなるまで歸つて行く御遊行の船の樂の音が聞えて山莊の人の心を刺した。男は嘘を云ふものであると女達がよく云つて居るのを聞くことがあるのを、其人等の階級の男のこととも思つた。貴族の男はそんな縱なことで女に臨むものでないと思つたが、さうでも無さうである。兵部卿の宮はお身持の善くない方と云ふ噂をお亡れになつた父宮も聞いて知つておい

でになつたればこそ、妹に或程度までの交際をおさせになつたが、結婚をさせようなどとは少しもお考へにならなかつたのであつた。その以後に非常に深い戀のやうに見せて自分等の心をお引き附けになり、終ひにこんなみじめな情けない思ひを姉妹がさせられるやうになつたと、あげまきの君は思ひ詰めて身體までも常と違つて來た氣がし初めた。小姫樣は却てそれ程わが身をはかなみもせず男を恨んでも居ない。あれまでに宮の思つておいでになる人なのであるから、我知らず頼む處が出來ても居た。それであつても戀しい人は見たい。忍びかねたやうな涙を頰に流して居るのを見ては、あげまきの君は哀れでならなく思ふのであつた。自分も生きて居たなら、あんな思ひをする日が來るのであらう、そんなに脆い心とは自分を思はないが、男を待たせて置くこと、辭んで居ることも限りのあることに違ひない。自分は今死ぬのが一番望ましいことである、死にたい。こんなことを考へこ

んで居るうちに身體も弱くなつて眞實の病氣になつてしまつた。何處となく身體の苦しい日が多くなつた。食事が少しもすすまない。あげまきの君の思ふことは唯自身に別れた後の妹の女王の上ばかりである。いかに身分の立派な良人を持つて居ても、こんな目を見せられて居ることの辛抱を、唯一人殘つてするかと思ふと憫然でならないが、またどうすることも出來るのでない。現世では自分は何一つの慰めも見出さないままで死ぬのかと心細がつて居た。宮はそののちまた宇治へ來ようとしておいでになつたのであるが、衞門督が宇治遊行の裏面を中宮にそつとお話して、世間では皆よく申して居ないとまで告げ立てをしたので、中宮はひどくお歎きになつた。陛下もまたお氣遣ひになつた。二條院に居るのがよくないのである、宮中へ入れて當分外出をさせないでおくが好いと仰せになつた。左大臣の六の君と結婚することをまだ宮が承知されないでも構はずに、宮中でその式を

擧げさせるなどと云ふことも決められた。薰の君はこれをじつとして聞いては居られなかつた。自分は何たる呆氣者か、八の宮が最後まで氣にお懸けになつたことがお氣の毒でもあり、また美くしい人達のその儘で老いて行くのが悲しさに、人らしい花やかさも覺えさせたいと思つて居る一方で、宮がとりもちをお逼りになつたから、自分は一人の女王を戀人に決めて一人をお讓りした。その女王がこんな辱めを受けて居ると思つて熱い涙ばかりを流して居た。二人とも自分の戀人として置くのに咎める人もない筈だつたのである、取り返しの出來ることでもないがと、悲しがつたり憤つたりして居た。宮はまして宇治の女王がお心に懸らない折もない。戀しくも氣懸りにもお思ひになつて、うつうつとしておいでになるのを、優しい母宮はお見かねにな つて、

『あなたが忘られない人があるならね、私の處へその人を來させて置

くことにしてね、目立たないことにしてお逢ひなさいな。あなたを一生唯の宮樣でお置きにならない陛下の思召なんだから、何んとかかとか批難を受けることだけは避けなくつてはね。』

と云つてお慰めになることもあつた。時雨の降る日に女一の宮の處へ匂の宮がおいでになつた。お傍に餘り人も居ず靜かであつた。女宮は繪を見ておいでになつた。几帳だけを隔ててお逢ひになつた。限りもない品の好い美しさ氣高さを持つて、またなよなよしさ艶しさも備へておいでになる妹宮を、宮は昔から地上にもう一人とない高華な美と思つておいでになるのである。唯冷泉院の姫宮だけは社會からお受けになる尊敬も、かしづかれやうも美しさもこの宮に相當する方かも知れぬ。その宮を戀しく思ひながら唯遠い遙かな處から眺めて居るのであるなどと宮はお思ひになつて、また山莊の人は嬋娟な點においては劣らない人であるとお心は忘られない人の上に走つ

た。繪を手に取つてお見になると、戀する男が忍んで逢ひに行く處などが描いてある。山里めいた面白い家に美人の居る繪もある。御自身の戀に引きくらべられるやうなのを妹宮に所望して宇治へ送つて遣らうと匂の宮はお思ひになつた。伊勢物語の繪の中に業平が妹に琴を敎へて居る繪のあるのをお見になつて、宮は少し近く姫宮にお寄りになつた。

『昔の人でも兄妹はかうして中よくして居たものです。あなたは中好くさせて下さらないのね。』

低い聲でかうお云ひになつた。どんな繪かと思つておいでになる姫宮に匂の宮は繪を卷いてお渡しになつた。下を向いて繪をお見になる宮のお髮がゆらゆらと動いて居るのをほのかにお見になる匂の宮は醉つたやうな心になつておいでになつた。この宮附の女達には身分の高い人の娘なども多かつた。そして皆美しい人ばかりが揃へ

られてあつた。浮いたお心はかうして宮中にばかりおいでになるうちにもう女一の宮附の誰彼を情人にしておしまひになつた。宇治を戀しくお思ひになりながらお行きになることの出來ない日が餘程經つた。姫樣が病氣をして居るのを聞いて薫の君は宇治へ行つた。それ程惡い容體でもないのであるが女は其れにかこつけて逢はない。

『聞いたばかしで心配しながら驅けつけたのだから、それに免じて病室の傍へでも通して下さい。』

と云つたから客はあげまきの君の寢た室の御簾の外に導かれた。物を云ふと姫樣は頭を上げて返辭などをした。宮がお心からでなくお寄りにならずにお歸りになつた船遊びの時のことを話して、

『氣を寛やかにお持ちになつて、餘りお恨みして上げないやうにして下さい。』

と云つた。

『私はね、お恨みしようとは思ひません。けれどもね、こんなことのあるのが分つておいでになつたので、お父樣が二人に獨身をお勸めになつたのだらうと、それだけが始終悲しう御座いますの。』

姫樣は泣いた。自身が辱められて居るやうに思つて薫の君は苦しかつた。

『世の中と云ふものはあなたの考へておいでになるやうな單純なものではないのです。無暗に人を惡く解釋なさいますが、そんなものでもありませんよ。宮さんのことなどは斷じて御心配に及びません。』

と云ひながら、我ことでないことにも氣ばかり揉まなければならない自分であるなどと薫の君は思つて居た。夜は病が惡くなるのであつたから、小姫樣が何時も傍へ來て寢ることになつて居るのに近い所に客の居るのは困るやうに思つて、女達が外の座敷へ移つてくれと云ふ

のを聞いて、

『私に介抱をさせて頂けないのが殘念だ。』

と云つて居た。祈禱を急に初めさせることを辨に命じて居るのを聞いて、生きたくない自分であるものをと思ひながら、またこのまま死んでは餘りこの人に濟まない、少し生きて居た方が好いであらうと、優しい心は思はせた。翌朝、

『どうですか、少しは好いやうですが、昨日の處まで行つてお話しても いいでせうか。』

と客は人に云つて遣した。

『今日は苦しいやうですが、然しこちらへ。』

とあげまきの君の言葉を傳へた女は薰の君を案內して行つた。前よりは懷しい風に自分をすると云ふことが恐しい死の前兆ではないかなどと男の胸は轟かぬでもなかつた。近くへ寄つていろいろの話をした。

『苦しくつてね、お返辭がね、出來ませんの、一寸お待ち遊ばしてね。』

と云ふ樣子が哀れである。男は泣き出したいやうな氣になつた。長居もして居られないので薰の君は歸らうとした。

『こんな時にこの不便な住居では困ることが多いから、養生のためと云ふことにして一先づ何處かへお移らせしようと思ふ。』

などと辨に云つて居た。寺の阿闍梨にも祈禱をするやうにと言傳ることを命じて行つた。薰の君の家來の一人で、山莊の若い女達の中の一人と戀仲になつた男が居た。その男が、匂の宮が外出をお禁じられになつて宮中にばかりお置かれになつて居ること、左大臣の姬樣をお婚せすることに尊親方がお決めになつたこと、女の方ではそれを待ち兼ねて居たのであるから、もう年內に式が行はれるであらうと云ふこと、宮がその事にお心が進まないために、自棄のやうにおなりになつて、

宮中の女達と浮いたことばかりをおしになるので、陛下も困つておいでになることなどを云つたのが、相手の女から傳はつて、かう云つたと云ふことが姫様の傍で女達の口に上つた。あげまきの君は胸がいつぱいになつて、いよいよ妹の女王の戀 終りの日が來た、妹は權勢の家の子をお得にならない前の假の妻だつたに過ぎないのであらうが、中納言の手前だけをお思ひになつて手紙だけに深い情も見せておいでになるのであらうと思ふと、人の恨めしさよりも、自分等はどうすればいいのかと深い深い處へ落ちて行くやうな氣になつた。けれど女達には眠つた振りで知らぬ顔をして居ようと思つて居た。小姫様は物思ひのある人のすると云ふ肱枕のうたたねをして居た。髪が横で溜つた様子などがたとへやうもなく美くしい。あげまきの君は、父宮の御遺言が思ひ出されてしみじみ悲しくなつた。

『お父様、おいでになる處へ私をお呼び下さい。こんなに物思ひばか

りをします子を捨てて一人でお行きになつて、夢にでもお姿を見せて下さらない。』

と心の中で云つて居た。夕の空を時雨がさつと通り過ぎた。少し青くなつた顔に白い著物を著たあげまきの君の、じつと外を見た目や額つきはどんなに見ても見飽きのせぬ勝れた美くしさであつた。大きい音を立てた風に驚かされてうたたねの人は目を覺して起き上つた。著物は紫がかつた薄い色を重ねて著て居た。顔は染めたやうに薄赤くなつて居た。

『お父様を夢に見ましたの、何だかね、御心配さうな顔をして此處にいらつしやつたのですわ。』

『さう。私は少しでもそんな夢をよう見ない。』

と云つて、二人は一緒に泣いた。

『この頃は毎日毎日お父様のことを思つて居ますから、來て下すつた

のかも知れない。私などはね、死んでもお父樣のおいでになる極樂世界へは逢ひに行かれないかも知れない。』

あげまきの君は來世のことまでもかう心細く見るやうになつて居た。

暗くなつた頃に匂の宮のお文が來た。小姬樣は見ようともしなかつた。

『餘り恨んだやうでない御返事をお上げなさいな。私がこのままで死んだらね、あの內の人達のことですから、あなたに無理に再婚を勸めたりするかも知れませんよ。宮さんが時偶にでもかうして手紙を遣して居て下すつたら、いくら分らない人達でも遠慮してそんな無法なことを持ち出して云ふわけはありませんからね、さう思ふと恨めしい宮さんもやつぱり賴みになるのよ。』

『私を殘して死んでおしまひにならうとお思ひになるの、そんなことが出來ますの。』

小姬樣は顏を著物で覆うて泣いて居た。

『誰のために生きて居たい氣をつかふの私が。』

かう云ひながらあげまきの君は燈を傍へ持つて來させた。小姬樣も漸く顏を上げて姊と一緖に例のやうな情をこまごま云ひ表してある宮のお手紙を讀んだ。これも噓なのであらうと思ふと一層恨めしい氣がした。綺麗なお生れつきの上に風流男に見られたいとばかり氣苦勞しておいでになる宮であるから若い人の戀しく思ふのは道理なことで、女王はお逢ひすることの出來ない月日の經つに隨つて堪へがたい心を抱くやうになつて居た。あれ程に云つておいでになつたのであるもの、この儘で消える戀とは思はれないと思ひ直す氣がまたしても附くのであつた。

あられふる深山の里は朝夕にながむる空もかきくらしつつ

と云ふ歌だけを書いて返した。これは十月の三十日のことである。

逢はれないままで月が一つまるで經つたと宮は味氣なくお思ひになつた。新しく情人を作つておいでになつてもお心はそれ程慰められておいでになるのでない。左大臣の子を娶つて、權力のある人とにかく婿舅の形式を作つて置いて、外に氣に入つた人があればその後に第二の夫人にしたら好いと中宮はお云ひになるのであるが、宮は私には考がありますと云つて、この結婚から逃れようと情を張つてお出でになる。浮氣な一時的の戀はしても、重大な結婚と云ふことをその人を置いてするやうな苦い味をその人に味はせたくないと、眞心から思つておいでになるのを知らない女は、時間の經つに添へて悲しみを深くするばかりであつた。薫の君は此頃の宮の御素行を知つて、思つて居たよりも輕佻なお心であると女方に同情して、宮には餘りお逢ひしないやうにもして居た。山莊へは毎日のやうに病氣を尋ねる使を出して居た。十一月になつて少し好いと聞いたが、公務も私用も多くて

五六日は使をも出す間がなかつた。どうであらうと、そればかりが氣になつて、何もかもうちやつて自身で行つた。全快するまで祈禱を續けるやうにと云つて置いたのであるが、少し好いと云つて阿闍梨を斷つて寺へ歸してあつた。例のやうに人が少くて寂しい靜かな家である。辨が出て來た。

『何處と申してお痛みの處もない御病氣なんで御座いますが、何も召上りませんと申したらお菓子一つ上らないので御座います。で御座いますから眞實に御衰弱遊ばしましてね、どんな欲目で見ましても何日までもお在でになられようとは拜見出來ません。私はそんな悲しい事のないうちに死にたいと計り自分のことを存じます。』

と泣き伏してしまつた。

『それ程になつて居られるのを何故もつとくはしく知らせて下さらなかつたのですか。』

薫の君はかう云ひながら何時もの通り病室へ行つた。枕の近くへ寄つてものを云つたが、あげまきの君は聲も出ないやうである。薫の君は自身の知らない間にかうまでなつてしまつた戀人を悲しく思つて寺の阿闍梨の外に幾人かの祈禱の上手な僧を呼んだ。家來達を幾人もこの家に詰めさせて置くことにもした。昨日までとは世界が變つたやうに賑かになつたので、心細い底に居た人達も安心した息をほつとついた。日が暮れたから何時もの客座敷へ來て食事をしてくれと女達は薫の君に勸めたが、せめて居る所だけでも近い所に居たいと云つて、病室の中を屏風で仕切らせて自身の席に作らせようとした。小姫樣は近い處へ男が來ることを苦しく思つたが、あげまきの君と薫の君との關係をもう夫婦以上のもののやうにも解して居る女達ばかりであるから、總て薫の君の言葉のままにした。法華經を聲を絶やさず續けて讀ませてある僧の數は十二人である。燈は南隣の間に附けて

あつた。病室は暗かつた。凡帳を開けて薫の君はあげまきの君の傍へ行つた。老いた女達が二三人居る。小姫樣は物蔭に身體を隱した。

『何故聲だけでも聞かせて下さらないの。』

と云つて、薫の君は手をとらへた。

『おいでになつたことは分つて居るのですが、物を云ふのが苦しくつてね、私はね、暫くおいでがなかつたものですからね、お目にかかれないで死ぬのかと思つてましたの。』

聞きわけられないやうな聲で女は云つた。

『あなたを待たせる程長く私の來なかつたのが殘念です。』

聲を立てて男は泣いた。手に觸る女の髪は熱で少しあつかつた。

『餘り人に物思ひをおさせになつた罪でかうなつたのですよ。』

と耳へ口を當てるやうにして云つた。恥しく思つて女は袖で顏を隱した。なよなよと美しい寝姿を見ては、この人を死なせたら自分は

どんな心持がするであらうと、胸も裂けるやうに薫の君は思ふのであつた。

『今夜は私が御看病しますから、ゆるりとお休み下さい。お疲れになつて居るでせう。』

と云つたので、小姫樣は少し遠い所へ行つた。死んだ跡にも氣强い女であつたと云ふ印象を殘して置きたくないと思ふので、女はこの人の看病を受けることをも退ける氣にはならなかつた。湯だけでも飲むやうにと夜通し男は頼むやうに云つて居たが、それも雫程すら飲めなかつた。不斷經の交代の僧達が來て元氣好く揃へて聲を張り上げたので此方では少し眠りかけた阿闍梨が思ひ出したやうに陀羅尼を讀み出した。それを濟ませてから阿闍梨は看病の客に話をしかけた。八の宮のことを云ふのである。極樂においでになることと思つて居たのであるが何時かの夢に俗のお形でお見えになつて、何も氣殘りがないやうに思つて來たのであるが、少し心配があるので、暫くの間行く處へまだ行かずに居るのが殘念である、そんな心を離してくれるやうな祈りをして欲しいとお云ひになつたことなどをも云つた。そのために弟子の五六人を近所の村落や京の街などで經を讀ませながら歩かせて居るとも云つた。薫の君は泣いて聞いて居た。自分の罪は父宮の來世までを煩はして居るのかと聞いたあげまきの君は、病苦の中で魂も消える程の悲しみをして居た。その街へ行つたと云ふ阿闍梨の五六人の弟子が師を尋ねて來て、庭の中門の處へ坐つて回迎の經を讀んだ。薫の君も人よりは信仰の厚い人であるから、身に沁むやうに思つてその聲を聞いて居た。心細い氣になつて小姫樣は病室の奥の方の凡帳の後にしよんぼりと坐つて居た。薫の君は正しく坐り直して、その人に、

『あのお經はどうお思ひになります、重重しいものでもありませんが

尊い氣がしますね。』

と云つた。そして、

『千鳥も悲しい聲で鳴いて居ますよ。』

とまた云つた。戀しい人に似たやうにも思はれる人であるが、答がしにくくて小姫樣は辨に取次がせて返辭をした。女王のこの病氣が八の宮の御成佛の障りにもなつて居るのであらうとかう思つて、薫の君は山の寺でも祈禱をさせ、京の所所の寺へも使を出して病氣平癒の祈をさせた。薫の君は宮中へも母宮の方へもお暇を願つて山荘を出なかつた。神道の祓などもさせたが、邪氣などの障で出來た病と云ふのではないから總て何の效力も病人の上に現はれて來ないのであつた。それに病人自身が癒りたい一心にはなつて居ないのであるから神佛の感受も惡いわけである。あげまきの君はこの機會を外さずに死にたい、もう薫の君と自分との間には何物を置く間隔もなくなつて居る

のであるから、病の癒ると云ふことは、この人の妻として生きて行くと云ふことになるのである、自分はこの二人の間の暖い情味をわすれられない、さうして夫婦になつたために、何方も氣まづい思ひを覺えさせられたりして、これを失つてしまふのが悲しいと思ふのである。自分は萬一命が留められた時には尼にならうかと思つたあげまきの君は今直ぐにもさうなりたい氣も頻りにしたが、云ひ出しにくいのを苦しく思つた。

『私はどうしてももうむつかしい氣がするのですがね、尼になると云ふとその功德で命の伸びることがあると云ひますから、さうしようかと思ひます。阿闍梨さんにさう云つて下さいな。』

と小姫樣に云つて見た。傍に居た者が皆泣いて、

『そんなことがあるもので御坐いますか、中納言さんがどんなに思召ますか思つて御覽遊ばせね、女王さま。』

と云つて諫めた。　薫の君があげまきの君の病氣のために此處に居詰なのを聞いて、その見舞に出て來る客もあつた。　主人の心痛して居ることの並並でないのを見て、主人のための祈禱を家來達は初めて居た。今日は宮中の大宴會の日であると薫の君は京を思つて居た。　風が荒く吹いて雪も散つて居た。　夫婦になることの出來ないままでこの戀人と死別をするのかと思ふと、其人の今迄の心が恨めしくもあつたが、唯だ少しでも身體を善くして前のやうにして話だけでもせめて出來るやうにしたいと云ふのが何よりの今の望みであつた。　一家の人は薫の君の居ると云ふことをどれ程力に思つて居るか知れない。　小姫樣は薫の君が近い處に居るのであるから、几帳が風にあほられるのに氣が置かれて隣の間へ行つた。　女達も居なかつた。　薫の君は病んだ人に身體を擦り寄せて、

『私はこんなに全心を傾けてあなたの病氣のために祈つて居るのに、

あなたは快くはならないで聲も聞かせてくれないやうになつたから悲しくてなりません。　先へ死んでは厭ですよ。』

と泣きながら云つた。　もう意識がそれ程確なのではないが、あげまきの君は顏をすつかり隱してものを云ふのであつた。

『少しでも快い間がありましたらね、お話がしたいと私も思つて居るのですがね、唯もう消えて行くやうな心持ばかりが續くのでね。』

自身をなつかしがつて居る樣子の見えるのが一層男の心を切なくさせた。　餘り泣いては逼つて來る死を覺らせるやうなものであるから思ひながら、堪へ難い心になつて薫の君はさめざめと泣いた。　少しでも厭はしい氣がこの人について起つたなら、別れた後で諦めを持つことも出來るのであるがと思つて、男はじつと見守つて居るのであつたが、いよいよ心の引かれることばかりが増して行く、美しい惜しい感じが心の底から湧くばかりであつた。　魂も自身から拔けて行く程

戀しい。

『あなたに先に死なれたら私は生きて居ませんよ。さうは思ひますけれど、死なうと思つても死なれないで居ることがあつたら、私は僧になつてしまひます。唯さうなつたら小姫樣がどんなに心細いかと氣になります。』

答へをさせようと思つてこんなことを云つた。あげまきの君は顏を隱した袖を少し除けて、

『こんな短命な運を持つて居てあなたに滿足をおさせすることの出來なかつたのも口惜しう御坐いますけど、妹を私だと思つて頂きたいと云ひました時ね、何故あなたは承知して下さらなかつたでせう。さうだつたら、あなたのためにも、あの人のためにもどんなに安心して死ねるか知れなかつたでせうにねえ。』

と云つた。

『私は薄命な人間だからでせう。どうしても悲しい思ひを一生して行かねばならない約束事なのでせう。あの時に私はどうしてもあなたの云ふやうに思ふことが出來なかつたのですよ。併しあの女王さんのことをそんなに心配しないでお置きなさい。私は盡しますよ。』

など男は慰めて居た。苦しがるものであるから、阿闍梨や外の僧を近くへ招んで加持をさせた。薫の君自身もある限りの力を集めて佛に祈つて居たが、見て居るうちにものが枯れて行くやうに總角の君は息が絶えてしまつた。泣いて遺骸から離れない小姫樣を、女達はやかましく云つて外の室へ伴れて行つた。薫の君は夢のやうな思ひで灯を近くへ寄せて死んだ戀人を見た。先刻迄隱した顏も唯だの美くしい寢顏をして前にあつた。髮に手を觸れると、さつと生きて居た時の匂ひがした。この人に死別れさせられるのが佛が道を勸める方便で

あるなら、悲しい思ひも忘れさせるために、何か心機の一轉することをこの遺骸から見せて欲しいと佛と念じるのであつたが、そんなかひももとよりない。せめて早く煙にしてしまつたならと思つた。あるかないかの身體だつたあげまきの君は、火葬の煙さへも濃くは立たなかつた。小姫樣は咀はれた人と自身を人の思ふのも恥しくて思ひ沈んで居た。匂の宮からはたび〲見舞を云つてお遣しになつた。姉の女王が宮をお恨みしたまま死んだのであるから、その方からのお音信を受けるのは辛い悲しいことであつた。薫の君は出家がしたかつた。三條の尼宮のお思ひになること、殘つて居る女王のことを思つては、それも心が許さない。あげまきの君が云つたやうに、この人と添ふことにして置いたなら、かたみと思つてどれだけ心の慰みになつて居たか知れないが、其當時はどうしても其氣になれなかつたと運命を悲しがつて居た。少しも京へ出ないので、世間でも餘程の愛妻だつたのであ

らうと噂した。宮中からのお弔使なども薫の君は受けた。自分は唯一人殘つた昔のゆかりと思つて親しい心を持つて居るのに、女王が疎疎しくするのは分らないと云つて、薫の君は話も仕合ふとするのであるが、自分と云ふものが間接に姉を死なせたやうなものであると、こんなことで悶悶として居る女王はまだ他人と話す元氣もなかつた。この人は鮮かな美人で、氣高い氣のする人であるが、懷しい和味を持つた點などは故人が勝れて居たと何かのことにつけて思ふこともあつた。十二月の夜の曇りのない月の空を御簾を上げて眺めて居ると、向ひの寺の鐘が鳴つた。女達に故人のことを語らせて聞いて居た。

『姫樣の御病氣のもとになりましたのはやはり兵部卿の宮樣で御坐いました。彼方の女王樣にお隱しになつて一人でお心を痛めておいでになつたことが並大抵では御坐いませんでした。お食事などもそれから次第次第におすすみ遊ばさないことになつたので御坐

います。』

と云つて泣く女もあつた、自分がした餘計なことがもとになつたかと思ふと口惜しかつた。念佛をしながら眠つたと思ふと直ぐまた目の醒めた夜中に、人聲が澤山して、馬の足音も聞えて來た。忌籠りの僧などもも何があるかと驚いたが、それは匂の宮のおいでになつたのであつた。さうと知つた時薫の君は隱れた方の坐敷へ行つてしまつた。まだ四十九日の忌が明けないのであるが、思ひ佗びて一晩雪に惱まされながらおいでになつたのである。どんなに積つた恨めしさもこれには紛れさせられる筈でもあるが、女王は逢はうとする氣にはなれなかつた。姉の悲しがつて居た心を、せめて命のあつた中に慰めることも出來なくて、今になつてどんな誠實を見せられても仕方がないと心の底から思ふのである。女達が代る代る賴むやうに云つて、やつと物越しに逢ふこと丈を承知させた。宮が云ひ譯をいろいろとおしになる

のを、女は唯つくづくと聞いてばかり居た。この人もあるかないかの樣子で居るのを宮は氣に懸つてならなくお思ひになつて、翌日は少しの批難位は構はない氣で山莊をお出にならなかつた。物越しでない話がしたいと宮は度度お云ひになつたが、

『もう少し人心地の附きました頃でしたなら。』

とばかり女王は云つて居た。こんな事を聞いた薫の君は一人の女を呼んで、

『女王さんが宮樣をお恨みになつて、さうされるのはもつともだけれど、憎いやうにお思はせすることは宜しくないでせうつて、私が云つたと話して御覽。』

と云つて、女王の處へよこした。恥しい氣がしていよいよ女はお逢ひの出來ない氣になつた。

『あなたは私があんなにして心持を云つて置いたことを皆忘れてし

まつたから、そんなに迄恨んで見せることが出來るのだ。』
などとお云ひになつて、恨んだり歎いたり宮はしておいでになつた。今夜も凡帳が中に置かれてあつた。遠い行末のことをさまざまに云つて、宮はこの戀の變らないことを知らせやうとされるのであるが、女には唯口上手とばかりよりは聞かれない。併し別れて居て恨めしいと思つた時よりは、この人に引かれる心のさすがに少くないのを感じないでは居られなかつた。
『こんな悲しい過去を作つて來ました戀に、どんな將來があると思はれませう。』
と女は云つた。
『そんなに將來が厭に見えるなら、現在だけ、この刹那だけでも私等は戀の勝利を現はして見せませう。』
と宮は云つておいでになつた。いろいろとお宥めになるのであつた

が、
『私は加減も惡う御坐いますから。』
と云つて女王は奥へ入つてしまつた。宮は涙を流しておいでになつた。薫の君が主人のやうにして女達の名をそれぞれ呼んで使つて居るのが、哀れなことども面白いことども宮はお思ひになつた。瘦せた顔をして中納言は宮にお逢ひした。死んだ戀人と自分のした悲しい戀の初め終りをお話しようと思ふのは唯だこの宮お一人であると薫の君は思ひながら、お話して居るうちに自制の心を失つて心弱い涙を多くお見せしてはと思ふので、言葉を少くして居た。泣いてばかり暮して居る人であるから顔變りがして居るが、それが見にくくないいよいよ清艶な人と思はせられる、女であつたならこの人に戀を移す氣にもなるであらうと、宮は御自身の心から戀人を疑つてまでお思はれになつた。世間の批難も女の心の恨みも輕くさせて京へ移らせること

にしなければならないとお思ひになつた。宮廷の人の思はくをお憚りになつて宮は二日目にお歸りになつた。年の暮になつては荒れない日がない程で、雪が上へ上へと降り積つて行つた。かうして冬の住居に悲しい心を抱いて籠つて居る薫の君の心は夢のやうであつた。あげまきの君の立派な法事が營まれた。匂の宮からも多くの弔慰金が贈られた。母宮からも冷泉院からもお逢ひになりたいと云ふ手紙が何時も來るので忌が明いたら薫の君は京へ歸らねばならないのであるが、それがまた悲しく思はれることであつた。山荘の人達はこの人が去つた跡を想像して味氣ながつて居た。宮から、自分は近いうちにあなたを京へ迎へる計畫を立てたと云ふお手紙が女王の處へ來た。中宮は薫の君が宇治の女王に死別れて悲歎の底に沈んで居ると云ふことをお知りになつて、三の宮もその妹の女王を並の戀人として思ふことは出來ぬのであらうと、同情をお持ちになつて、二條院へ呼んだな

らとお云ひ出しになつたのである。そんなことであらうと山荘で薫の君は噂した。三條の宮を出來上らせてあげまきの君を迎へることを自分は思つたのであつたと、こんなことにも取返しのつかない悲しみに身を嚙まれるのを覺えた。小姬樣が獨身で居たならその代りとして伴ふ人であるがと思ふのであつた。宮がお疑ひになるやうな戀はまだ起つて居ない。唯だこの人を保護する責任を深く感じて居た。

早蕨

山荘にも春は來た。女王は姉に別れて一人今日まで生きて居ると云ふことが夢のやうに思はれてならない。父宮のお薨れになつた跡の悲しさよりも今度の寂しさは堪へ難い苦みを明暮味はせた。死にたい時に死なれぬ命を持つたことがあさましいやうにも女王は人間の身を思つた。向の寺の阿闍梨から蕨や土筆を面白い形の籠に入れて持たせて遣した。

年が代りましてからお變りはありませんか、唯今ではお殘りになつた女王のお身體一つの安穩を佛に絶やさず祈禱をして居ります。

これは寺の小供の摘みました春の山の初穂です。

　春ごとに奉るとて初わらびつみしならひを忘れざるかな

この歌は女王のお耳に入れて下さい。

どんなに一所懸命になつてこの歌が詠まれたかと思ふと、歌の意もうれしくて、悪筆のぶざまな手紙の上に女王の涙は落ちた。それ程の思ひでないことに、美くしい文字の多くを列ねて見せるうす情の男の手紙と、これと、こんな比較もされた。

　この春は誰にか見せんなき人のかたみに摘める山のさわらび

返歌を外の女に書かせた。使には被け物をした。豊麗な顔がさまざまの物思ひで少し痩せたのが、品と艶かしさを一層深くして見せた。あげまきの君にも似て見せた。二人が一緒に居た頃は美くしい趣が別々で、少しも似た處がないやうに見えたのであつたが、一人になつた今はうつかりと大姫様かと思ふことが女達にはあるのを、あれ程に死

んだ人を戀しがる中納言が、この女王をかたみに見る運を持たなかつたのを云つて悲しんだ。薫の君の方から始終訪ねによこす使の男などが、

「殿様は正月だと云ふのに涙目ばかりしておくらしになつて居ますよ。」

よくこんな噂をして居るので、薫の君が姉の女王に持つて居た戀の深さが、かうなつて始めて分つたやうな氣も女王はした。おいでになることの困難な匂の宮は、いよいよ女王を京へ迎へることにお決めになつた。正月のもの忙しさが少し靜まつた頃薫の君は心に餘る程のこの思ひ事は外の誰に云ふことも出來ない、兵部卿の宮がおありになるばかりであると思つて、二條院へ來た。靜かなもの寂しい夕方で、宮は縁近いところで梅を眺めながら十三絃を鳴しておいでになつた。薫の君は手の届く處の梅の小枝を折つて手に持つてお座敷へ上つて來た。

『あなたは梅だね、靜かで居て、內方に戀も情熱も隱した人だから。』

と宮はお云ひになつた。

『何だか分りません。』

笑ひながら客は云つて居た。戀人に別れた心持を宮が聞かうとされた。自身は戀の上に悲しい思ひ出の外は持たないこと、初めてあげまきの君を見た時から今日までの思ひの曲折を、身に沁んだやうにも、時時はまた第三者めいた輕い調子にも云つて薰の君は語つた。多感な宮は御自身のことでおありにならないことに袖も濡れ通る程の淚を流して、賴もしい聞手になつておいでになつた。外の景色も悲しさうに曇つて居た。夜になつては烈しい風が吹き出してまだ冬のやうな氣がした。風に灯の消された室の中で、なほ若い貴人達は盡きがたく戀を語つたり聞いたりして夜を更した。終ひ迄二人の間に淸淨が保たれて居たと云ふことだけは、まさかさうでもなかつたであらうと、宮

は受取りにくいやうに聞質してお云ひになるのであつた。薰の君は今日初めて胸が少し空いた氣がした。宮も女王を近いうちに迎へようと思ふとお云ひになつた。

『嬉しいことです。私も戀しい人のかたみの人だと思ひますのはあの人一人ですから、出來るだけの世話がしたくてあんな處にも置かずに京へ移らせたいとも思ひましたが、私が餘り立ち入つてはあなたの御感情を害しないかと憚られることもあるのです。それはこんな話もありましたから。』

と云つて、あげまきの君が、自分は獨身で居たいが妹を自分と一緖の人と思つて愛してくれと云つたと云ふ話をした。辨に導かれて入つた寢所の中にその女王一人の殘されて居た夜のことは云はなんだ。心の中では悲しい思ひの慰めには、さうして山莊から女王を伴つて來ることがしたかつたと、後悔の芽が漸く葉を出して茂りかかつて居た。

始終こんなことばかり思つて居たならどうなるであらうどんな悲しい葛藤を自分の心から生み出すであらうかと、ふと身慄ひして我にかへつた。それにしても女王の入嫁の用意は自分がしなければならぬ責任があると思つて、何かとその心構へにかかつた。山荘でも若い綺麗な女童女などを雇ひ集めたりなどして家内の人の心は喜びに滿たされたやうに見えるのであつたが、女王には悲しい心が離れなかつた。山荘を捨てて世の中へ一足出る心細さはたとへやうもない。それでもまた宮のお云ひになることに背いて、かうして居るのが好いとも思はれない。これ程の深い戀をあなたの心一つ、それも山荘を出ると云ふことだけに掛けて、悲しい終りを見ようとするのかと宮が恨めしさうにお云ひになるのも道理は道理であると思つて居るのである。入嫁は二月の月初めと極められて居た。姉のために着た喪服を脱ぐ日も來た。母親を知らずに大人になつた自分のために、姉はまた母でも

あつた。母だけの喪に服したいとも心では思つたが仕方がない。薫の君から美くしく仕立てられた衣服が多く贈られた。輿入の日の供の人先方の召使への贈物などもいろいろと運んだ品が屆けられた。

『お兄樣でおあり遊ばしても、これだけのお氣が附くものでは御座いません。女王樣、およろこび遊ばせよ。』

老いた女達は主人にかう云つて居た。若い人等は主人とも思つて居た優しい美男のその人と、女王の身の上とがかつきり別に區別せられてしまふ日の事を思つて寂しい思ひもして居た。前日になつて薫の君が出て來た。例の客座敷へ通されて坐るにつけても、この山荘と自身とが長い馴染であることがしみじみと思はれて、その自分が女王の良人になつて此處から伴ひ去ることが自然のことなのであらうにと思ふのであつた。あげまきの君から度度その結婚を勸められたこと、その人の口からもあるまじいこととも否まれなかつたこと、それを自

身の心から後の日にこんな寂しい思ひをする道を取たと、それからそれへ思ひが廣がつて、胸の痛くなるのを覺えた。姉妹の顏を覗いた襖子の空穴も戀しい氣がして寄つて見た。隣の間は戸が閉つて居て暗かつた。女王はこの人の來たことにまた昔の思ひ出が誘はれて涙にくれて居た。女達に勸められて御簾越しに逢つた。

『悲しい話は今日は不吉ですからしないことにします。』

と薫の君は云つて、暫くして、

『あなたの今度おいでになる二條院の近い處へそのうち私も移りますから、何でも用があつたら私の處へ云つて遣すようにして下さい、あなたの十分のお力になりたい氣なんですが、あなたがそれを受けるのは厭だとお思ひになりはしまいかと何時も遠慮を私はして居るのですから。』

かう云つた。

『いよいよ京へ參るものとお思ひになりませうが、私は此處を出て行くのが悲しくてならないので御座います。』

女は低い聲で云つて居た。悲しさうなはかなさうな樣子がよくあげまきの君に似て居た。自身の心からこの人に人妻として向つて居ると悔が痛ましい程心を苦しめるのであるが、そんなことの端も口へは出して云はなかつた。

『お移りになつてからも、このお心安さで時時は逢つて話させて下さい。』

などと云つて薫の君はこの場を立つた。薫の君は輿入の手筈をいろいろと人人に指圖した。この山莊の留守居には鬚の家從が殘る筈であるから、それらの人の食料などを自身の領地の方から運び入れさせることなども決めた。辨は花嫁君の供にはふさはない自分であるとも思はれるし、いろいろの悲しい目ばかりを見せられて居る長い命を

まだ續けて生きて居るかと、人に見られるのも恥しいからと思つて尼になつて居た。客の前へ來ないのをしひて呼んで薫の君は逢つた。

『私はこれから、も此處へは時時來て見る積りだから、誰も知つた人の居なくなるより、あなたの殘つて居てくれるのが嬉しいですよ。』

かう云つて薫の君は泣いて居た。尼はもとより涙もろく泣く。昔は美くしかつた人なので、尼額になつてさつぱりとしてからは少し若くなつたやうにも見えた。あげまきの君を戀しく思ひ詰める心は、何故かうして尼にでもして命を留めて置く方法をとらなかつたか、さうして二人が一生心だけの夫婦で一緒に暮すのがよかつたとこんなことも思つた。どんな日が來たら少しの慰めでも見出すことが出來るのであらうと、呆とした心になつて、このまま山莊を出る氣もしない。日が暮れた。さすがに泊ることも憚られて薫の君は京へ歸つた。中納言の悲しさうであつたことを云つて辨は女王の前で泣いて居た。他

の女達は嬉しさうに衣服の裁縫にかかつて居た。

『私はね、人中へ出て行つてどうなるかと思ふと心細いのよ。だからまた歸つて來ますよ。あなたとまた一緒に居ることになるだらうけれど、暫くの間でも別れて居るのが悲しくてならない。尼さんになつたからつて、外の家へ行かないものぢやないのだから、そんな餘計な遠慮はしないで京の家へも時時來て頂戴ね。』

懷しさうに女王はかう云つて居た。あげまきの君の使つて居た手道具などは皆辨のにするがいいと女王は云つた。いよいよ辨の尼は子供のやうに泣いて泣いて泣き止まなかつた。二條院から迎へに來た人數の中には四位や五位の男が多く交つて居た。宮は自身で來たいとお思ひになつたがさうもならなかつた。薫の君の方からも附添の家來が大勢遣してあつた。大體のこと以外は皆中納言からの氣配りで花やかに何事も行はれるやうである。迎への男も内方の女達も日

が暮れると云つて女王の出ることを急き立てた。女王に續いて車に乘つた太輔と云ふ女が、
『こんな嬉しい日がまゐりましたのね、前に宇治川に身を投げて死んで居ましたらどうでせうね。』
と云つた。もう一人がまた、
『過ぎた悲しいことも忘れられませんけれど、今日は何うしても天へ昇つて行くやうな氣が致します。』
と云つた。この二人はあげまきの君を薫の君に結婚させたがつた人達で自身等は其方附にならうとして居たのを、しらじらしく自分を祝つて居ると思ふと、女王は疎ましい氣がしてものも云へないのであつた。險しくて遠い路を通つては、來ない人を情のないやうに恨んで居た事も自分の方が無理であつたと思はずにも居られなかつた。家をこれ程離れて行つた事のない心には、どんな世界へ運び去られるかと

云ふ怖れの影がさして、行末が心細かつた。山荘で暮した日が取り返したい氣がして泣いた。十時過ぎに二條院へ着いた。待ち佗びておいでになつた宮は車の處までお出になつて、女王を抱いてお降しになつた。新夫人の室、座敷廻りの裝飾が目の覺めるやうにしつらはれてあつた。女達の部屋まで宮が氣をお配りになつて美くしく仕度されてあつた。匂の宮と宇治の宮の女王との戀をそれ程大きい意味にとつて居なかつた世間の人は正式にかうして二條院へ女王の入るのを見て今更のやうに驚いて居た。薫の君は三條の宮へこの二十幾日に移轉する筈で、此頃は毎日其方へ指圖に通つて居るので　つたが、近い此處で今夜は餘所ながら女王の二條院へ入る樣子を知らうと思つて、夜の更ける迄三條の宮に居た。供をさせた家來が歸つて來て、委しく見て來ただけの話をした。嬉しく思つて聞きながら、一方では又何と云ふ味氣な

い目に逢ふのかと云ふ氣がした。左大臣は六の君と匂の宮の結婚をこの二月中に行ふ積りで居たのに、妻としてそれよりも先に迎へねばならぬ思ひ沁んだ女が此方にあると云ふやうにして、宮が女王を二條院へお呼びになつたのを、恨めしがつて居ると人の云ふのを氣の毒にお聞きになつて、宮は手紙だけは折折六の君に送つておいでになつた。

夕霧の君は姫樣の裳着をその結婚前にさせると云つて、儀式の用意を大きくさせてあつたのを、延べるのも見ともないと思つて二十日過ぎに式をした。叔父と姪の關係であつても、薫の君ばかりは他人の婿にさせるのが惜しい氣がして、いつそ六の君をこの人と結婚をさせたらどうであらう、長い間隱して居た妻と死別れて寂しい思ひをして暮して居る好い折であるからと思つて、ある人にその話をさせた。

『人生の無常をつくづく感じて、自分の身體を自分とも思へないやうな心で暮して居るのですから、結婚しようなどは思ひも寄らないこ

となんです。』

と薫の君は取り合はなかつた。兄が頼んで居ることをと夕霧の君は恨めしくも思つたが、清い人柄を信じて居るので、心をしひてまげさせようともしなかつた。薫の君は二條院の櫻の盛りになつたのを自宅から見て主のない山荘で淋しく咲いて淋しく散る櫻が思はれて悲しかつた。急に匂の宮をお訪ねする氣になつて二條院へ行つた。宮は大方此處で新婚の女王とばかりおいでになることを、薫の君は世間に對しても嬉しいことと、女方の後見心から思ひながらも、例の奇怪な妬みが自身に添へて居ることもまた感じられた。何やかやとお話をして居るうちに夕方になつた。宮は參内をされるのだつたので、車の用意が出來、供の家來などが庭へ集まつて來たから、そのお座敷を出て女王の御殿へ薫の君は行つた。山荘に質素に住んで居たとは變つて、氣高い氣の漂つた奥ゆかしい住みぶりをして居る御殿の御簾の外から、

影の見える美くしい童女に聲を掛けて自分の來たことを云はせた。宇治に居た女なのであらう、それが直ぐ出て來て客に座蒲團を出したりなどした。

『近い所ですから、何時でも伺へるのですが、用のないのに參るのも氣が咎めて御遠慮をして居ました。此方の櫻が私の家からも見えるものですから、私はいろんな悲しいことなんか思はせられて居ます。』

と云つて、客は悲しい目附で庭の方を眺めるのであつた。姉の女王が生きて居て、近い其家に來て居るのであつたなら、始終往來をして嬉しいと思ふ日も見ることが出來たであらうのにと思つて泣いた。女王はまた姉に死別れてかうして居ることは、山莊で二人の居た時よりも悲しいことであると思つた。

『あの方樣の深い御親切は、お身體がかうして全く決りました、唯今にお報い遊ばすもので御座います。近い處へお通し遊ばしまし。』

と女達が云ふのであるが、女王は自分で出て物を云ふことがまた恥しい氣がして躊躇つて居る處へ、參内される宮がそのことを告げにお出でになつた。薫の君の來て居るのに宮はお氣が附いた。

『中納言をなぜあんな緣側などへ置いておくの、餘り過ぎやあしないかと思ふ程の親切をあなたに持つ人ぢやないか、私が感謝していいかどうかは分らないが、ともかくも餘り失禮だよ。近い處へ通して昔の話でもしたらいいだらう。』

とお云ひになつた。そしてまた、

『併し眞實の氣は許してはいけないよ。』

と氣づかはしさうにおささやきになつた。女王は眉を顰めながら、どすればいいかと思つて居る。

寄生

當代の藤壺の女御と云ふのは以前亡くなつた左大臣の子であつた。未だ東宮と申し上げた頃の後宮に、誰よりも先に入つた人であるから、陛下は一種の暖い情でこの人をお愛しになるのであつたが、幾年經つても立后と云ふやうな花やかな運はこの人に顔を背けて居た。その內に中宮のお生みになつた宮方は皆立派な大人におなりになつて、ますます中宮のお勢は加つて行く。それに藤壺の女御はまた一人の親王をもお持ちすることが出來なかつた。唯一人お生みしたのは姫宮である。自分はこの宮を勝れた人にお育てして、それを唯一の慰めに

生きようと失意の女御はこんなことを思つて、内親王の御教育にある限りの心を籠めて居た。宮はお美くしくもおありになつたから陛下は可愛くお思ひになつた。女一の宮とは一般から受ける尊敬の度が違ふだけで、その外の事は餘り劣らない程華美やかに宮はかしづかれておいでになるのである。それは女御に左大臣の遺した財産が並並の多さではなかつたから出來た事でもあつた。宮が十四におなりになつた年、裳著の式をおさせするために春から專心に用意をして居た女御は夏になつて神經性の病氣にかかつて間もなく死んだ。夢のやうに思つて陛下もお悲しみになつた。情の深い氣質の女であつたから宮中に奉仕する男女は皆惜しがつた。若い女二の宮の泣いてばかりおいでになることをお聞きになる陛下のお心も苦しかつた。愍然でならなくお思ひになつて、四十九日が濟むと直ぐ宮中へお呼びになつた。黒い喪服を著た宮を陛下は毎日藤壺へ見にお出でになつた。

宮は愛らしい品の多い顔をしておいでになつて、性質も極く靜かな方であつたから、輕卒を人のためにさせられないかと云ふ懸念などは拂はないでもいい女の子であると陛下は安心をしてはおいでになるのであるが、大藏卿、修理太夫などと云ふ女御の異腹の兄弟だけを僅かに外戚に持つておいでになる宮の前途をお思ひになるといろいろな御心配も湧かないことはない。獨身で置かうか結婚をさせた方がいいかと云ふ事についても陛下はさまざまに考ておいでになつた。菊の花に通り雨がをりをり涙のやうに注いで、何となく物の身に沁むやうに思はれる日、陛下は女二の宮に死んだ女御の話などをしておいでになつた。こせつかぬのんびりとした言葉で宮も返辭を申し上げておいでになつた。この優しい美くしい内親王を愛する男がないことはないであらうとお思ひになつた陛下のお胸に、朱雀院が女三の宮を六條院へお嫁がせになつた時のことが浮んだ。其時はああでもあるま

い内親王の身の修りは外につけようもあらうなどと云ふ批難の聲も立つたが結婚をしたので源中納言と云ふやうな立派な子も宮は持つことが出來たのである。中納言が保護して居るために女三の宮が尊ばれて居ることは上皇の在世の日にも劣らないではないか、さうでなく宮が獨身で居たのだつたなら、それが心から出たことではなくても、不心得な男のために今日になつてどんなみじめな境遇に置かれて居るかも知れないのである。こんなことをお思ひになつて、御自身がこの宮の配遇者を決めて結婚をさせようと云ふお氣におなりになつた。陛下は女三の宮の子のその源中納言を婿にしたいとお思ひになつた。中納言も何時迄獨身では居ないであらうから、結婚をしないうちに自分はこの話をほのめかして見ようと思つておいでになつた。陛下は宮を相手にして碁をお打ちになりなどした。日が暮れかかつてまた菊に一しぐれ降りかかつた景色の面白いのを御覽になりながらお供

して來て居る役人をお呼びになつた。

『清涼殿に誰が居るか。』

『中務卿親王。上野守親王。中納言源朝臣薫。』

『中納言を呼べ。』

と陛下はお命じになつた。薫の君は藤壺へ來た。

『こんなことでも今日はしようと思ふから。』

陛下は碁盤を中納言にお示しになつた。

『私が負けたら出さうと思ふ賭物があるのだが、何だらう。』

こんな陛下のお謎を聞かうとは思ひ掛けないことであつたから、薫の君は胸が鳴つた。三番の勝負を二番までお負けになつた陛下は、

『とうとう勝たせてしまつた。賭物の約束があつたのだね。今日はこの庭の菊を一枝折るのを許さう。まだ眞實に負けたとも云へないから。』

とお云ひになつた。それからは折々陛下からこの時に似たやうなことを薫の君はお聞きしたが、血の靜かなこの人は女二の宮を妻に得ることを急ぐことでもないと思つて居た。この事が噂になつて夕霧の君の耳にも入つた。あゝは云つて居ても結局この人に六の君を娶ることは承知さすことが出來やうと思つて居たのであるから、陛下の婿にならうとすると云ふのに力を落した。今でも手紙は六の君の處へ送つてお遣しになる匂の宮を、それは賴もしい戀ではないにしても、結婚した後に眞の愛情が起らないものでもないから婿にお取りする事にしようとかう夕霧の君は心を決めた。陛下でさへも進んで婿をお搜しになる世であるから、普通の家の娘などは多少の傷のある緣組でも辛抱して早くさせぬと女の盛りが過ぎてしまふとこう思ふからである。夕霧の君はこの結婚を早く成立させたいと中宮にも度度お賴みした。

『左大臣があなたを婿にしたいと思ひ立つてから何年になるか知れないのだからね、それを逃げてばかり居るのだから餘り惡いではありませんか、親王さんと云ふものは後援者次第で立派にもみじめにも見えるものですからね、よく考へて御覽なさいね、唯の人こそね、妻を二人持つやうになつてはいろいろ困ることも出來るだらうけれど、それでもまた現にあの左大臣のやうに二人の奧樣を同じやうに大事にして世間體もよくやつて行く人もあります。それに陛下はあなたの未來をどうさせたいと望んでいらつしやいますか、ねえさうでせう、その位置を思つて御覽なさい、何人妻を持つても好いわけおやないの。』

と中宮は匂の宮にお云ひになつた。宮は六の君が他人の妻になつても好いとはもとから思つておいでにならないのであるから、結婚をお勸められになつては唯默つて聞いておいでになるより外はなかつた。

併し權家の婿になつては囚はれたやうなもので、したいことが何も出來なくなると云ふことが今迄宮を躊躇はせたのであつたが、中宮がお云ひになるやうに左大臣の恨を買ふのは自分のために損なことであると大分近頃は分つておいでにもなつたのである。氣の多い方であるから按察大納言の家の紅梅の女王にも絶えず今でも手紙は送つておいでになつて、その人と左大臣家の六の君には同じ程の戀を運んでおいでになるのであつた。次の年の夏になつて、女二の宮の女御の喪はもう明いたのであるから、此方から何とか云へば陛下は何時でも結婚を許さうとしておいでになると薫の君に云ふ人があつたから、餘り知らず顔をして居るのは不敬であると思つて、女二の宮のお附きの中の知つた女の手を通して宮に手紙をお送りして居た。いよいよこの縁談をおきめになつたとか人にも聞き、自身でも陛下の思召が顯はに會得されもした。この人の心にはあげまきの君に死別れたことばか

りが今日も悲しくてならないのである。これ程自分の生涯に大きい影響を與へる因縁のある人と自分が、何故夫婦の關係だけが結べないでしまつたのであらうと、よくこんなことを薫の君は思つた。どんなに身分のない者でもあげまきの君に少しでも似た顔の女があつたなら自分は躊躇はずに戀人にするであらう、支那にあつたとか云ふ反魂香の煙の中ででも故人がもう一度見たい、そんなことばかり思つて薫の君は陛下の婿になるのが急がれないのであつた。左大臣は六の君の婚禮を八月中にすると決めた。その事はもう誰にも知れ渡つた。二條院の女王も聞いた。自分は薄命な者であるから、そんな目を見る日が來るであらうと思ひ思ひ今日まで暮らして來たのである、宮が浮ついたお心でおありになることは、夫婦になるずつと前から自分は聞いて知つて居たのであるが、一緒に住んで居た今迄はさうした樣子もお見せにならず、お口ではまた情深いことのありたけを云つて聞かせて

おいでになつた、俄に御本質通り新しい妻に愛をお移しになるのを見るのはどんなに辛いか知れない。其時の自分の心持は想像することも出來ない。下樣の人のやうに今日は他人と云ふやうに顧みもせられないやうなことにはなるのではあるまいが、どんなに悲しく思はれる事ばかりが日日あるやうになるか分らない、終ひにはまた宇治の山莊の人になつてしまふのが自分の決つた運らしい。かう思ふ女王は獨身で居るやうにとお云ひになつた父の宮の御遺言がまたしみじみ思ひ出されるのであつた。自分の姉の女王は唯だ女らしい優しい弱弱しい氣質の人と見えたが、心の底に確りとした處のあつた人であつた、中納言が今日迄まだ死別れた悲しみをよう忘れないで居るとは云ふものの、もし姉が生きて居たなら、自分の流すのと同じ涙を姉に流させて居るかも知れない、姉はそれを見通したのであらう、どうしても獨身で居ようと考へて、終ひには結婚を逃れるために尼にならうとまで

云つた自分に比べて姉はどれ程賢い人であつたか知れない、父宮と姉の女王は輕卒な哀れな女だと思つて他界から自分が眺められるであらうと悲しく思ひながら、それもしかたのないことであると諦めをつけさせられて、女王は六の君のことは知らぬ顏をして居た。宮は今までよりも一層濃い愛情をお見せになつて、自身の持つ戀は未來の世まで變らないものであると云ふやうなことを毎日お云ひになつた。女王はこの五月頃から懷妊つて居た。目に見えて苦しがりもしないのであるが、常よりも食事が進まないで横になつてばかり居た。宮はまださう云ふ身體になつた女をお知りにならなかつたから、唯暑い頃であるからかうであらうと思つておいでになつた。併し時時は、

『女は惡阻になるとそんな生理狀態になるとも云ふよ、さうなんぢやないの。』

かう云つてお見になることもあつた。そんな時には何時もさうでな

いと女王は恥しがつて打消すやうにばかりして居たから、女達も差出て知つたことを云ふことが出來なかつた。八月になると宮の御婚禮の日が外から女王の耳に入つて來た。宮は隔心をお持ちになると云ふのではなく、打明けた時の女王の心持が哀れに想像されて、口へ出すことがお出來にならないのであるが、云つて貰へないことが女には恨めしかつた。二條院へ女王が來てからは、特別な御用の時の外は宮は宮中でお寢みになることもなく、また外の女の處で泊つておいでになるやうなこともなかつたのであるから、自分が傍に居ない淋しい夜を多く味はせることが俄に起るのは女王にとつてどんなに苦しいことか知れない、今から時時離れて居る癖をつけて置く方が好いとお思ひにもなるし、また顏を見るのが堪へ難い程悲しくお思はれになる時があつたりもして、宿直をすると云つて御所からお歸りにならない夜があるやうになつた。そんなことも皆心變りからと女には解釋されて

居た。薫の君は女王を可哀相でならなく思つて同情して居た。宮は浮いた心でおありになるのであるから、女王を愍然にはお思ひになつても、華美やかにかしづかれた新しい妻が好きになつておしまひになるであらう。また權力のある其新しい妻は宮の御自由を多く束縛するであらうから、二條院では待ち明す夜がちになるであらう。今迄がさうではなかつたのであるから、どんなに女王は悲しむか知れないと吐息がつかれるにつけて、何故あの人を宮にお讓りしたのであらうと云ふ後悔がむらむらと起る。あげまきの君を見てからの自分は、澄み切つたものであつた心を失つて夢中になつて戀しがつた。それでも掠奪結婚はするのが厭で、あの人の心に小さい戀の芽でも生へて來る日を待つて居た。あの人は自分の思ふやうな心にはならずに、獨身で居たいとばかり云つた。さすがに自分を憐んで、同じ人だと思つてくれと云つて、妹を妻にするのを許さうとしたのを、自分は唯だその人の

心が恨めしくてならなかつたから、さうした考へは自分の力で壞して見せようと思つて、宮と妹の女王とを結婚させてしまつた。苦心して心配して宮を宇治へお伴れして行つた時のことを今から思ふと、氣違ひになつて居たやうに自分が思はれる、自分が自分の身にさうして仇をしたのであると口惜しくてならないのであつた。其時のことをお思ひになつたら、宮は自分への義理だけでも女王を粗略におしになることは出來ない筈である。併し宮にお逢ひしてもあの時分のことなどは一切口にお出しになることもない、浮いた心の人と云ふものは、女のためばかりでなく男同志の情誼などにも薄いのであらうなどと薫の君は憎いやうに思つた。自身に比べて人がさう見えるのはこの人として無理はない。あげまきの君に死別れてからの自分と云ふものは帝王の女を許されても嬉しいとは思はれないのである、二條院の女王を自分が妻にして居たならと思ふ心が月日に添へて增して行くの

も死んだ人の身代りと思ふから心が引かれて行くのである、妹思ひだつたあの人は臨終に近い時にも、何も心殘りはないが、自分が妹の良人で居てくれぬことを見て行くのが悲しいと云つた、死んだ魂がそのために迷ふかも知れぬと云つた。若し見て居たなら女王がこんなことになつて行くのをどんなに自分の罪だと恨んで居るかも知れない。こんな思ひばかりをしながら二十四の薫の君は一人寢の床で眠らない夜を明すことが多かつた。使つて居る女達には憎くなく思ふ人もあつたが心からの戀人もない。其中には八の宮の女王と同じ程な身柄の人で家の衰へて居たために引き取られて居るやうなのもあるのである。出家する時のほだしにならぬやうにと嘗てはそんな用心も戀の上に拂つて居た自分が、人の妻である人に愛著心を起すやうに拗けてしまつたのもあげまきの君があつたからであると、薫の君は自身ながら憐みもした。思ひ明した夜明に霧の中からいろいろの花が姿

を見せる中に、はかなげな白い朝顔の交つて居るのが薫の君の心を引いた。死んだ戀人と、この命の短い花とが同じやうに思はれたのでもあらう。家來を呼んで、

『私はこれから二條院へ行かうと思ふから、目立たない車を仕立てさせてくれ。』

と云ふと、

『宮樣は昨日から御所においでで御坐います。昨日さう申してお空車を引いて歸りますのを見まして御坐います。』

と其男は云つた。

『さうか、併し奧樣の御病氣をお見舞に出掛けようよ。』

薫の君はかう云ふのであつた。庭に歩いて出た時に、薫の君は朝顔を手で引き寄せると露がはらはらと袖に零れた。夢を見て居るやうな目でそれを見ながら折つて手に持つて車に乘つた。二條院の女達は

この朝の客に逢ふことを女主人に勸めた。女王はこの人を恥しく思ふことも今では大分薄らいで居た。どんな病氣であるのかと薫の君の問ふたのには、はかばかしい答を女王は與へなかつた。平常よりも沈んだ容子で居るのが哀れで、薫の君は、世の中と云ふものは誰も滿足が得られるものではない、皆不足のあるのを辛抱せねばならないのである。物思ひは誰にもあるのであるなどと云つて、兄が妹に云ふやうに教へたり慰めたりして居た。女王のものを云ふ聲が昔の戀人と少しの違ひもないやうに聞かれるのであつたから、薫の君は御簾などは上げて差向ひになつて話したい氣が込みあげるやうになつて起つた。病んで居る顏が見たいとやるせなく思つたりもした。

『私などは人に死別れた悲しみを長い間し續けたり、今更仕樣のない戀の後悔を人に持つて見たりして悶えて居るのです。官位が思ふやうにならないと云つた煩悶をする人などに比べて罪の深い煩悶

を自身の心からして居るのです。』

こんなことを薫の君は云ひながら開いた扇の上に載いた先刻の朝顔を眺めた。何時の間にか赤味を帯びてなつかしい色になつて居るのを御簾の下から中へ入れた。

『白い露と同じ色をした花でしたが。』

枯れかかつた花にはまだ落ちずに露が浮いて居た。

『枯れた花がはかないものなのか、露がそれよりも哀れなものなのか分りませんのね。』

つつましさうにかう云ふのが薫の君にはあげまきの君であるとよりは思はれない。

『先日宇治へ參りましたよ。非常に荒れたやうな氣がして悲しく思はせられました。六條院がお薨れになりました後では、出家されてから二三年お住みになつた嵯峨院でも、また六條院でも見る時には

胸が搔き亂される程の淋しみに襲はれまして、よく終ひには泣いてしまひました。左大臣が六條院へ奥樣の宮樣をお伴れして行つて住むやうになつたのはあれは荒らす丈荒らさせた後の事です。今では當代の宮方が皆大人におなりになつて、六條院へそれぞれお住みになつて居ますから、彼處は花やかな昔に歸つたやうですが、其當時は實に寂しいものだつたですよ。かうは云ひますが私が院にお別れしたのはまだ幼い時のことで、今の心には夢のやうに殘つて居るだけです。女王さんに死別れた時の悲しさは夢とは思はれません。私の骨まで嚙むやうです。』

と云つて薫の君は泣いた。あげまきの君を懐しい人とも思つて居ない人であつても、この涙には動かされて泣くであらうと思はれるのが、物思ひの重なる心細い折で姉の戀しさばかりを思ひ暮して居る女王は自身も物も云はれない程悲しくさせられた。忍泣の聲が薫の君の

耳にも聞えた。二人は何方からも相手を哀れに思つて居た。

『山里は世の憂きよりは住みよかりけりと云ふ歌が御坐いますね。此頃は何だかそんなことばかりが頭に浮いて來ましてね、辨が羨しう御坐いますの、それに今月の末の宮樣の命日には宇治に行つて居たいと思ふんで御坐いますから、あのね。そつと彼方へ私の行くことを計つて頂きたいとお願ひしようと思つてましたの。』

『宮樣の御命日の法事のことは私があの阿闍梨に皆よく賴んで置きました。女王さん、宇治の家は寺にしたらどうでせう。あのままであつては見る度に私は悲しがらせられますから苦しいんです。併しあなたの思召はどうですか、御遠慮なく云つて下さい。あなたに他人らしくなくして頂くと云ふことだけが私の生命です。』

と薰の君は云つた。山莊へまた入つてしまひたいと云ふ心が女王に見えるのを、とんでもないことのやうに云つて薰の君は留めて居た。

宮の御性質として自身の居ない時に何故來たかとお疑ひになるであらうと思つて、薰の君は歸る時に家令の右京太夫に、

『昨日お歸りになつたと云ふことを聞いたので來たのですが、お目に懸らうと思ふのには御所へ行つた方が好いでせうか。』

こんなことを云つた。

『今日は必ずお歸りになるので御坐います。』

『それではまた夕方に伺ひませう。』

と云つて出た。二條院の女王と云ふ人は薰の君には逢ふ度に素直に戀しくなる心と、意地惡い後悔の心と、其等を思ひ返して制して行く苦しい心とをば起させる人であつた。薰の君はもう二年經つた今までまだあげまきの君のために精進をして、明暮その人のために讀經もして居た、尼宮のものの苦にならない眠つたやうなお心にも、これぱかりは氣づかはしい事にお思はれになつた。

『私はもうそんなに長い間生きて居るのではないだらうから、私の居る間だけでもあなたは生がひのある顔を見せて居て下さい。あなたが出家すると云つても尼になつて居る私が留めるなどと云ふ矛盾したことは出來ないけれど、私はやつぱり悲しいからね、佛樣に濟まない涙を零して罪を深くきつとしますよ。』

とお云ひになつたから、薫の君は家に居る時にはつとめて物思ひのない顔をして居ねばならないのであつた。六條院の左大臣は婚禮の當夜になつて、十六日の月が空の上に上る迄新婿の匂の宮がおいでにならないのに氣を揉んで、捜らせて見ると、宮は夕方に、宮中からお出になつて二條院へお入りになつたと云ふことが知れた。左大臣は息子の頭中將にお迎への手紙を持たせて遣つた。宮はお氣辛いので御所から直ぐに六條院へ行かうと思つておいでになつたのであるが、夕方に女王に手紙をお書きになつた其返事がどんな身に泌むやうなものであつたか、戀しくなつて歸つておいでになつたのである。宮のお心は最愛の人の歎くのを知つて出てお行きになることも出來ないのであつた。沈み切つた女王の心の癒らないのをどうすれば好いであらうとお思ひになつて默つて二人で月を眺めておいでになつた處へ中將は來たのである。女王は今迄も強いて心を押へて、何も知らない顔をして通して來たのであるからと思つて、苦しい今夜の心にもまだ氣が附かない風を作つて居た。その心持がよく分つておいでになる宮は哀れでならなく思つておいでになつた。中將が使に來たので、さすがに其一家に氣の毒であるとお思ひになつて宮はお出にならうとした。

『一寸出て直ぐ歸ります。一人で月を見てはいけないよ。魂が拔けて空へ上つてしまふと云ふよ。』

と云ひながら宮は正殿へお行きになつた。お後姿をじつと見るうち

に涙が流れて海のやうになつて行くのを知つて、自分は良人が戀しい
のであるらしい。愛を外へ分て居る良人が戀しいのであるらしいと女
は自身の心を憎く思つた。幼い時から寒い寂しい運命の下に居た自
分ではあつたが、この幸福が長い間續かうとは思はないで居ながらも、
自分は人の妻として平和な日をある時の間送ることが出來たので何
時の間にか人らしい身になつた氣もして居たのを、今度の事があつて
また自分は氷の谷の底へ突き落されてしまつた。心細いこんな運命に
その手で導ひた恨むべき人を慕つて居る心が悲しく思はれてならな
い。せめて何とか諦める心になつて見たいと思ふのであつたがそん
なかひもない。松を渡つて行く風の音はけうといものであつた宇治
の山おろしに比べては懐しい響であるのが、今夜の心には山莊の椎の
葉の鳴る音の方が好いやうに思はれた。
『もう奥へお入り遊ばせ。月をお一人で餘りお詠めになるのはいけ

ないことなので御座いませんか。それに奥樣はお菓子一つお召食り
にならない此頃のやうなことで終ひにはどうなると御召します。
大姫樣の御病氣の初めが思ひ出されまして、私共は心配で心配でな
らないので御座いますよ。』
老いた一人の女は傍へ來て女王にかう云つた。
『嬉しいことぢやありませんねえ。けれど決してこれからだつた宮
樣は奥樣を粗末に遊ばすやうな事はないでせう。初めの奥樣程戀
しいものはないと云ひますからね。』
彼方でこんなことを云つて居る若い女達の話が聞えた。女王は堪へ
難い侮辱を受けて居る氣がした。こんな厭なことも聞かなければな
らないから自分は恨めしがつて居る風はこれからも女達に見せまい
と思つた。女王は人に良人を惡く云はせたくなくて、自分一人で恨ん
だり憎んだりして居たいのであらう。薫の君の情の深い人であるこ

ことを云つて、其人に女王が添はずに、宮の夫人になつて苦勞をおしになると云つて、朋輩同志に主人の運命について歎息して語つて居る者もあつた。新妻の六の君を宮は氣に入つてお思ひになつた。餘り小い姫樣ではない好い程な恰好の人であつた。どんな女であらう、美人であるのを鼻に掛けたやうな、萬事尊大な、性質なども優しくないそんな人であるかも知れないと宮は危んでおいでになつたが、さうではなかつたらしい。更けてからおいでになつたのであるから秋の夜であるが直ぐ明けた。宮は二條院へお歸りになつてもお心が咎めて西御殿へは直ぐお行きになることが出來なかつた。正殿のお居間で暫くお寢になつてから起きて六の君に手紙をお書きになつた。嬉しくない御樣子ではないとお傍に居た女達は目引き袖引きして居た。大抵は唯の御關係でないことになつて居る女達であるから、

『西御殿の奥樣はお氣の毒ですね。どんなに大切に思はれていらつ

しつても今迄のやうなことはありませんからね。』

こんなことを小氣味よげに蔭口するのも女王のためには氣の毒なことである。返事を此處で見てから行かうとお思ひになつたが、お氣に懸つてならないものであるから宮は女王の御殿へお行きになつた。少し起き上つて迎へた女王の薄赤くなつた寢起きの顏を、今朝になつてこの人の美くしさが勝れて殖えたやうに思つて宮はお見になつた。涙ぐんだ目でじつとお見詰めになるから女王は恥しく思つて俯向いた。はらはらと顏にかかる黑い髮の美くしさも外の人には見られない程のものであると宮はお思ひになつた。

『何故かう何時迄あなたの身體は惡いのだらうね。夏だからとあなたは云つて居たから、涼しくなるのを待つたけれど、秋になつてもまだかうなんだもの。困るねえ、祈禱も利かないねえ。誰か眞實に祈ることの上手な坊樣はないかしら。』

など云つて、きまりを惡くお思ひになる宮は紛らしておいでになつた。こんな事にも口で餘り親切らしく云はれるのは、却つて實のない氣がして嬉しく思ふことが出來ないと女王は思ひながら、默つて居るのも惡いと思つて、

『昔からよくこんなことがあるのですけれど、うちやつて置くと自然に癒るのですわ。』

と云つた。

『自然に癒つて來ないもの。』

と云つて宮はお笑ひになつた。懷しみの多い愛嬌のある美人としてこれに越す女はないであらうと、女王に滿足した心も宮は持たせられておいでになりながら、また一方のお心では六の君を早くよく知りたい、深く見たいものであると思つておいでになつた。それでも傍においでになる間は昨日と同じだけの愛情がこの人に注がれて、變らない

夫婦で來世も逢はうと言葉を盡して宮はお云ひになるのであつた。

『眞實にこの世は短いのですわね。私はね、けれどその短い時間にあなたの變つておしまひになるのを見なければならないのでせうねえ。さうですわ。けれど、來世だけは別だらうと思ひますから、ひよつとするとお云ひになつた通りに私は幸福なあなたの戀人になることが出來るかも知れないと賴みにされますわ。それもまた欺されてしまふかよく分らないことですけれど。』

今日ばかりはかう云つた後で女王は泣いた。宮の前では隱し切つて居た涙の零れ出した後は留めようとしても留らず流れるのを恥しく思つて顏を背けた。宮は肩を持つて御自身の方を向かせて、

『私がこんなにあなたのことを思つて居るのに、あなたは私を恨んで居たの、さうでなければ昨夜一晩のうちにそんな惡い心に變つたの。』

と云つて袖で女王の涙をお拭きになつた。